

『拾翠愚草抄』——翻刻と解題——

位 藤 邦 生
相 原 宏 美

『拾翠愚草抄』 解題

阪本龍門文庫蔵『拾翠愚草抄』は山科言継（一五〇七—一五七九）
自筆の日次家集である。

言継は戦国時代、後奈良天皇・正親町天皇に仕えた廷臣で、家督
を嗣いで内蔵頭・御厨子所別当を勤めたほか、加賀権守・按察使・
太宰権帥などを歴任。帝の信頼も厚く、権中納言を極官とする山科
家にありながら、権大納言にまで昇った。皇室経済の困窮緩和のた
め大名らに献金を募るなど、幅広い活躍で知られる。

言継の家集としては、すでに『権大納言言継卿集』（『群書類従』、
『私家集大成V』所収）が翻刻されている。こちらが永禄五年（一
五六二）から天文二年（一五七四）に至る言継晩年の詠草であった
のに対し、ここで取り上げる『拾翠愚草抄』は、大永七年（一五二
七）から天文十年（一五四一）まで、青年期を覆う十五年分の和歌
を収めたものである。

『拾翠愚草抄』に関しては、これまで川瀬一馬氏編『龍門文庫善
本書目』（阪本龍門文庫 昭57）、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究（室
町後期）』（明治書院 昭62 改訂新版）などに書誌が掲げられなが

らも未翻刻であったが、二〇〇三年冬から、阪本龍門文庫の WEB
上 (<http://yamato.lib.nara-wu.ac.jp/y05/html/151>) で画像が公開されて
いる。

一、書誌

阪本龍門文庫蔵、一冊。孤本。縦 23.0 cm × 横 20.2 cm。楮紙、袋綴。表
紙は洪引きの包背装（後装）、外題箋「拾翠愚草抄」下部欠損。□。帙（後
装）題箋は川瀬一馬氏筆、「拾翠愚草抄」。本文は片面八首を基本と
し、全七十五丁（ただし1丁は、もと遊紙への書き入れと見られる）。
1丁裏（1ウ）左下に「言継」の四角黒印が押され、巻末に「天文
十年十二月日 拾翠藤 花押」との日付・署名を有する。

公宴御会や諸亭での月次会、和歌習練のため行われていた「物書
会」などへの出詠歌が中心で、歌数は合計九百七十一首。題のみ記
載するものを含めて、全体で九百九十九首が見えるが、そのうち二
十八は題の記載のみで和歌本文を欠くため、「歌数」は上記となり、
ここから他人詠三首（2・825・999）をのぞく九百六十八首が言継の
詠である。稿者は以前、「山科言継の質問状——言継卿記紙背文書』
に見る富小路資直の和歌指導——」（『古代中世国文学』20号 平16・

1)で『拾翠愚草抄』について触れた際、「大永七年から天文十三(1544)年までの九百六十首を収める」としたが、誤りであった。この場を借りてお詫びし、訂正させていただきます。

表紙見返しには「大永七」から「天文十」までの目録が付され、実際に天文十年までの詠草を収めるが、原表紙外題(打ち付け書き)には「詠草第一従大永七年
至天文五年 花押」とあることから、当初は、天文五年までを一まとめとする構想であったことが知られる。

二、書名の由来

「拾翠」は言繼の雅号である。いつからこの号が用いられたかは定かでない。阪本龍門文庫蔵『發句』(天文九年から天正三年までの言繼の発句集)や、同蔵『家傳秘方』(享祿四年言綱・言繼写)の表紙にも「拾翠」の鼎形朱印が見え、頻繁な使用が知られるが、日記『言繼卿記』で年時が確認できるのは、永祿九年十一月二十八日条「拾翠老人」(言繼60歳)、永祿十一年十二月二十六日条「野叟拾翠」(同62歳)など、ずいぶん時期が下ってからであり、本書の天文十年は、早い使用例の一つと考えられる。

「拾翠」とは、春の野山に遊び、若菜を摘むことをいう。杜甫の詩「秋興八首」には、

佳人拾翠春相問 佳人翠を拾うて春相問ひ

仙侶同舟晚更移 仙侶舟を同じくして晩に更に移る

とあり、『還魂記』「尋夢」も「佳人拾翠春亭遠 佳人翠を拾うて春亭遠く」とする。春の野を逍遙する佳人のたおやかさとともに、世俗を離れた仙界のイメージをも併せ持つことばである。言繼は「杜詩美六冊」(天文十八年十一月二日条)を所有し、杜詩に親しんでいたことから、雅号の由来は、あるいは前掲の「秋興八首」などであらうかとも思われる。

三、日記所収歌との関係

『拾翠愚草抄』の始まる大永七年冒頭には、「是已前哥千二百餘首有之破捨畢」の注記がある。言繼はこの時点で、それまでの詠草を破棄し、「初の家集」という強い意識のもと、『拾翠愚草抄』の編集にかかったとみられる。言繼は当年21歳。父の代理で禁裏小番を勤める機会が増え、世界が急激に広がった時期に当たると。現存の『言繼卿記』が同じ年に始まっていることも、決して無関係ではなからう。当時言繼は、家集と日記とを、どう捉えていたのであろうか。

『拾翠愚草抄』所収の言繼詠九百六十八首を、日記所収歌と比較すると、その関係は以下のようになる。

- ①『拾翠愚草抄』にあつて日記にないもの 830首
- ②両者に重出する歌 109首
- ③日記にあつて『拾翠愚草抄』にないもの 29首

大永から天文初期にかけては日記の散逸が激しく、記事が皆無の年も多いため(通年で残るのは大永七年のみ)、全体に①が多いのは

当然であつて、『拾翠愚草抄』所収歌と、日記に見られる和歌との関係には、さらに慎重な判断が求められる。

両者の関係を、最も比較しやすい②について見ると、重複する和歌本文には、表記の違いこそあれ、さほど大きな異同は見られない。日付や詠作事情についても、日記と『拾翠愚草抄』の詞書は概ね一致しており、その信憑性は高いといえるが、中に、数は限られるものの、大きな矛盾をきたしているものがある。こうした相違は、『拾翠愚草抄』の成立事情とも関わる問題であるが、紙幅の都合もあり、詳細は別稿に譲ることとする。

①は『拾翠愚草抄』公開で初めて明らかになる和歌である。また②の中にも、日記では一部欠損して伝わらず、『拾翠愚草抄』で補完が可能となった和歌が多くある。これら新出和歌の考察が必要なのはいうまでもないが、同時に大切になるのが③の調査である。家集に入集するか否かを分けたのは、一体何か。各首、詠作状況の詳細な把握に努めるとともに、表現の上でも比較検討を行い、言継が何を基準にその判断を行ったかなどの課題を、今後明らかにしていきたい。

最後になりましたが、閲覧と翻刻のご許可を賜りました財団法人阪本龍門文庫の各位に、衷心より御礼申し上げます。

(相原宏美・本学大学院文学研究科博士課程後期在学)

今後、ここに翻刻した自筆本『拾翠愚草抄』を利用して、言継の

和歌作品の特質を考察したり、当代歌の具体相を調べるなど、『拾翠愚草抄』の資料価値はいよいよ高まってゆくであろうが、今回この翻刻を掲載した雑誌の標題「表現技術研究」の側面から、一、二の指摘をしておきたい。たとえば、享禄三年正月二十九日の言継亭での月次会で、言継は、次の歌を詠んでいる。

聞恋 はつせ山おのへのかねのよそにのみ

さてもいつまでき、わたるべき(一五二)

(以下、引用する言継の歌は、任意に表記を改めた。)

また、同じ年の三月二十八日には、伏見殿での物書会の際の歌として、次の歌を残している。

夜梅 梅が香の空に満ちずは春ながら

さやけき月の影を見ましや(一六九)

言うまでもなく、それぞれ、定家の

年もへぬいのるちぎりは初瀬山

おのへのかねのよその夕暮(新古今集・恋歌二・一一四二)

おほぞらは梅の匂ひにかすみつ、

くもりもはてぬ春のよの月(新古今集・春歌上・四〇)

を踏まえて、一ひねりしている。高名な定家の歌を本歌にするわけではなく、発想を借りて、さらにそれに捻りを加えたというべきであろう。言継の作歌修行の一方法であった。

ひろふべき玉をなぎさにたどる身は

思ふもくるしわかか浦波(五〇二)

と嘆いた言継ではあったが、『拾翠愚草抄』だけを見ても、さまざま
な技法を試みている。

月に見せ風にさらせる白きぬに

つ、むかきねやさける卯花 (三六二)

雲にいり霞に消えて床しめし

野は露ふかき夕ひばりかな (四二二)

けふに暮れて春はあすより夏木立

それもかたみと猶やながめん (四四九)

等の双貫句法、また

おのづから田づらの里は秋の田の

かりほの庵をかけてすむらん (一〇七)

おのづから清きひかりは月影も

みかきがはらの名をやみすらん (二〇四)

春の雨ふりくらす比はおのづから

苗代水を空にまかせむ (二四二)

など、十七首にのほる「おのづから」の句を含む歌の考察など、当
代和歌の傾向や三条西家の歌の特色などと比較して、今後研究を深
めてゆかねばならない課題であろう。

思わず解題にすぐわぬ言葉を書き連ねたが、これも、表現技術研
究における『拾翠愚草抄』の価値を言いたいたためであった。ご寛恕
を乞う次第である。(位藤邦生)

【凡例】

翻刻にあたっては、なるべく底本に忠実であるよう心がけたが、印
刷と通読の便を考え、以下の方針に従った。

一、変体仮名は使用せず、すべて現行のかなに改めた。

一、異体字・旧漢字も一部、現行の漢字に改めたものがある。

一、底本で和歌は二行書き、上部に大きい字で歌題が書かれている
が、本稿では歌題を右(上句の上)に寄せ、字の大きさも統一した。

〈例〉

躑

かへらんは名残さすかのけふの日も
くれなるふかきいはつ、しかな

躑

かへらんは名残さすかのけふの日も
くれなるふかきいはつ、しかな

一、虫損・抹消などで判読の困難な文字、判読存擬箇所、ミセケチ、
ぬりつぶしによる訂正、補入は、以下の記号をもって示した。

■ 虫損・抹消などで判読困難な文字

□ 判読存擬箇所(判読私案を傍書)

Ⅱ ぬりつぶし訂正

傍線 ミセケチ

○ 補入 (例、○あ) : 補入により「あ」文字が補われていることを示す。

一、和歌と発句それぞれに、仮の通し番号を付し、和歌は題の上に
数字で、発句は句頭に「発1」のような形で掲げた。

「拾翠愚草抄」翻刻

拾翠愚草抄 (題箋)

【目録】

大永七 同八元 同二 同三 同四
 同五元 同二 同三 同四 同五
 同六 同七 同八 同九 同十

【本文】

某 四品所望不許之時

1 愚なる身は從すなひ四の位山のほりかねてそしはしやすらふ

享祿五年二月卅日春日祭上卿參之時於社頭讀る

飛鳥井中納言左衛門督藤原雅綱

2 神まつるけふを待えて御かさ山花も光をそふる色哉

3 さく花のいつくはあれと春の日の光にあたる色そことなる

【言繼】印

1ウ

大永七年

是已前哥千二百余首有之破捨畢

正五位下行内蔵頭右近少將藤言繼花押

廿一才

大永七年四月廿五日於廣橋亭兼日三首

4 躑 かねらんは名残さすかのけふの日も
くれなるふかきいはつ、しかな

5 鳴 夕まくれ秋のあはれのかすくを
かきはつくさし鳴のはねかき

6 朝 朝なく鳥がなく音におきいて、
旅行人のさそいそくらむ

四月廿七日於万里小路月次三首
7 路卯花 玉梓の道つ、きなる卯花は
時しらぬ雪のふるかとそおもふ

8 待郭公 まちわひて打もねぬ夜の明かたに
一こゑなるやまほと、きす

9 寄苔恋 いかにせむなを日にそひてしけり行
いはほの苔のふかきおもひを

同六月廿四日於柳原亭當座物書會
10 思 いかなれはくるしさふかき思ひ川
わたらぬ袖も先しほれつ、

七夕
11 七夕野 ひこほしもけふのこよひをかた野なる
天河原にさそちきるらむ

12 七夕鳥 世々かけてさそおもふらん七夕も
はねをならふる鳥の契りを

同八月十五夜予興行
13 月下浅茅 露にやとる影はふもとのあさちはら
みねゆく月は空にのみして

14 寄月祝 あきらけき月の光や君か代の
くもらぬ影を空にみすらむ

同廿三日物書會
15 寄苔恋 いかにしていはほの苔のふかみとり
ふかき思ひの色をみせまし

同廿九日物書會
16 秋祝 わか君の光をそへて天下
くもらすすめる秋の夜の月

同九月三日於愚亭物書會
17 河紅葉 かつみれはちらても水に大井川
木々のもみちの色をうつして

18 村紅葉

露時雨いかにそめてか一むらの
木すゑは千々のもみちなるらん

—
2ウ

同八日於資直卿亭物書會
19 菊

露の間も猶もふるてふ菊なれば
さかりなる色をいく秋が見む

同十日賀州白山長吏白光院勸進五十首
20 初鴈

人ならばとはまし物をはつかりの
こし路の山の神の気色を

同十三日於四糸亭物書會
21 月前擣衣

月清みいやはねらるゝ夜もすから
おきゐの里に衣うつなり

同當座
22 停午月

みるかうちにかたふきやせん程もなく
はや半天の月のひかりは

23 月似霜

秋ふかきまかきの草にをく霜は
くもりなき夜の月にそ有ける

24 寄月懷舊

こゝろなき身にたに忍ふいにしへの
月をさこそは人のみつらむ

同日於伏見殿御張行
25 月前松風

月にさはる雲霧もなく晴る夜は
恣に音して秋かせそふく

26 月下擣衣

あさころもうちねぬまゝになかむらん
こよひくまなき月のひかりを

—
3オ

27 田家見月

小山田のいをねぬ秋の夜もすから
なくさむ友や月の影なる

同九月十五日
28 の行路梅

野をとをみ分行そてに梅のはな
そこともしらぬ香はにほひつゝ

29 暮秋雲

てふ鳥のかすみに入てくれし春も

秋はしくれの空のうき雲

同十八日於柳原亭物書會
30 秋旅

うすくこき袖かとそみるたひころも
たつたの山の木々の色く

同廿三日於官務亭物書會
31 山紅葉

山ふかみたれうへをきてたくひなき
名にはたつたの紅葉なるらん

同廿五日於柳原亭
32 霧

そことみし里の木すゑも立こめて
霧のうちなる遠の一むら

同日公宴老父代
33 藤

松のはの色さへみえずさきそひて
なかきしなひの藤そかゝれる

34 霧

おほろ夜の影かとそみる立のほる
霧のうちなる月のひかりは

35 山家

おくふかきこの山すみもある物を
とふ人なくはいかてしらまし

同廿八日於愚亭物書會
36 秋竹

秋ふかき露もしくれもいたつらに
つれなき色や窓のくれ竹

37 秋懷

わきてその色しなけれと夕暮の
秋はおもひのふかき比かな

同十月三日於愚亭物書會
38 残菊

をさまよふ籬の霜のあさなく
又秋みゆるさくの色かな

39 歳暮

かくはかり嵐もさむき雪の日に
いかてかあすの春はとひこん

40 頭悔恋

つゝみえぬむねのけふりのいたつらに
よそにたつ名のさらにくやしき

—
3ウ

同八日物書會
41 閑中雪

けぬかうへに又ふり積る雪の日は
鳥たになかぬやまのかけかな

42 薄暮嵐

夕間暮はれぬ時雨は山の名の
あらしにもろき四方のみち葉

同十月十八日物書會
43 暁聞千鳥

浦かせもさえ夜夜半の明かたに
友なし千とり独なくなり

44 名所浦忝

おもふそよなを君か世はすみ吉の
うらはの忝の常磐かきはに

同廿三日物書會
45 野寒草

春の色をいつかはみまし枯わたる
野へはをしなみ霜の下草

同十一月八日物書會
46 窓燈

まなひうるわさしなけれと夜もすから
か、けてむかふ窓のともし火

同十三日於愚亭物書會
47 岡雪

雪つもる岡邊の松のいくむらも
みな白妙のにこと色そなき

同十八日物書會
48 暁関路

あつまにと夜ふかくやとをおき出て
まつ鳥か音にあふさかのせき

同廿五日一身
49 落葉

色く、にそめし木の葉やちりぬらん
にしきをしける秋の下みち

50 千鳥

さむき夜をあかしかねてや行かへり
所さためす千鳥なくらむ

51 海路

あらかりし波かせもいまおさまりて
舟ものとかに通ふ海はら

4ウ

4オ

大永八年

享祿元年

三月十三日叙

従四位下行右近衛少将兼内藏頭藤原朝臣花

五月廿七日於万里小路亭會
52 夜蘆橋

夜もすからしのふむかしのそての香を
はな橋のにほひにそしる

53 五月雨

つくりなす庭はさなから山ふかき
たきつ岩ねの五月雨のころ

54 寄松祝

わかみとり猶立そひてことしより
いく千世かへんやとの松かえ

同六月三日物書會
55 遠夕立

このさとにふるかとみれば程もなく
はや遠かたの夕立のそら

同七月廿日理覚院勸進
56 普門品

のちかひをきけはたれもみな
もらさし御法の色に身をかへ
たれもきこむむなしからしな

同八月十五夜公宴御當座初參
57 杜月

月はた、心つくしの木の間にも
いく田のもりのいく夜すむらむ

58 月前萩

をく露も玉をみかきてすむ月に
にしきをしける野への萩はら

八月十八日物書會
59 松残雪

打かすむ空のとかにてきえ残る
雪間の姿を花かとそみる

60 海邊月

くもりなき秋の最中と田子の浦の
底さへみゆる夜半の月かな

享祿元九月九日於万里小路會

6オ

5ウ

5オ

61 菊久盛

さきそふや山路ならねと露のまも
千世をためしの宿のしら菊

同後九月十日井家修理進興行月次
62 江月冷

雲霧をはらふか月のすみの江に
恣ふくかせの遠さかり行

63 柞紅葉

うすくこく青葉もまじるは、そ原
露もしくれもいかにそめけむ

同十月十六日於廣橋亭當座
64 落葉

ちり敷て山路色とるもみち葉は
ふま、くおしきにしき成けり

65 冬月

雪にいま四方の草木のはなみれば
秋にもまさる月のかけかな

66 舊恋

おもひいつやあさき契りのうきをのみ
かこちやりしもいまは恋しき

同十一月廿八日井家修理月次
67 泉

涼しさはなをいやましにむすふなり
あかすも夏をわすれ井の水

68 對鏡憶昔

老やいかにむかふか、みはとをからぬ
わかむかしにもかはるおも影

同十二月日物書會
69 寄神祝

くもりなき時をそおもふ天てらす
神の光を君か光に

7ウ 7ウ

6ウ

享祿二年

從四位下行内藏頭兼右近衛権少將藤原朝臣花

正月十九日公宴御會始御題一身
70 春松契齡

春ことにみとり立そふたままつの
いく代を君に契りをくらむ

同廿二日於四条亭當座
71 松間梅

にははすは消残る雪とまかへ見ん
恣にましりてさける梅かえ

同廿八日於愚亭月次會始
72 梅花久薰

春ことになをさきそひていく千世も
色香つきせしやとの梅か枝

同日當座
73 春雨

晴るともふるともみえずかきくもり
そらはくれ行春雨の比

74 祝言

むかしにも立かへりつゝ國やすく
道も道たる時をしそおもふ

同廿九日於甘露寺亭
75 梅薰風

いく千とせかはらぬやとと梅か香を
吹つたへたる代々の春かせ

同二月九日物書會於愚亭
76 春月

いかなれば雲もさはらぬ空にしも
影おほなる春の夜の月

77 祝言

あふくそよあらし波かせおさまりて
のとななる代の春のひかりを

8ウ

同二月十二日月次會愚亭
78 春月

ふくかせのさそへる花のしら雲に
かすまぬ月もかすむとそ見る

79 海帰鴈

帰るかりこし路の海の浪の花に
よし野の春やおもひ出らむ

80 忍恋

露の命きえなはきえねかくとしも
いひ出ぬへきおもひならねは

同當座
81 梅

此ころはたのめぬ人そまたれける
軒はの梅の花のさかりに

82 泉 あつさをもおほえずこゝにむすふての
しづくもすゝし山の井の水

同十四日物書會於愚亭

83 霞中春雨 よこ雲の名残もかすむあさ明の
空のみとりに春雨そふる

84 寄露別恋 道しはの葉にをく露やふかむらん
わか衣くの袖のなみたを

同十九日物書會

85 冬獸 草も木もうつもれはつる雪の日も
ふす猪の床そしるくみえける

同三月四日於官務伊治亭物書會

86 栽花 いにしへの心やはなのみやこ人
うへすはかゝる春にあはしを

87 寄花夢 さくをまち散をしたふも花はた、
おもへはおなし春の夜の夢

同十四日於愚亭月次

88 花盛開 さかりそとゆふ山みれは白妙の
雪になり行花の色かな

89 苗代水 なはしろにせきいる、水もますらおか
かへすあら田のふかきにそみる

90 名所旅 爰にきて帰らむも又しかすかの
わたりかおたる旅そ物うき

同日當座

91 やまさくら さきつゝく梢やいく木山さくら
かゝるははななくひあらしと

92 まつ ときはなる名にしあれとも松かえの
みとりの色は春の一しほ

9才

同十七日物書會

93 水石契久 君か代に契りをかなん龜のおの
山の岩ねの瀧津なかれを

同廿四日於愚亭物書會

94 海邊霞 雲水のさかひもわかぬなめかな
かすみてとをき春の海はら

95 野外萩 日へても分はつくさし秋萩の
はなをかきりの宮城野のはら

同四月十一日飛鳥井勸進先人七廻

96 囁累品 三たひまでわするなどのみいひしこそ
まことにふかきをしへなりけめ

同十二日於愚亭月次

97 新樹朝風 あさなくみたれて露のふかみとり
茂る木すゑをかせわたるなり

98 郭公未遍 かたらふもまた打とけぬ聲すなり
みやこやたとる山ほとゝきす

99 逢不會恋 とし月もはやふる川のすきにしに
又あひみんをおもふくるしさ

同日當座

100 早苗 種まきし日数おもへはいつのまに
露をくほと早苗とるらん

101 橘 むかしたかみきりにちかくうへをきし
はな橘のにほひそめけん

102 初逢恋 うかりつる恨もいまのうれしさに
わすれてかはす新枕かな

同十四日於東坊城亭物書會

103 雨中蘆橘 むら雨のをきそふ露も玉しきの
御はしにみえてさけるたち花

同十九日物書會

9才

104 窓前螢

いたつらにわかすむ窓とおもへはや
はやく過行ほたるなるらん

同五月十九日於愚亭月次

105 菖蒲

けふとてもあやめはかりやふきそふる
しつかすみかは蓬生のやと

106 照射

ともしして夜(○る)はずからにあつさ弓
いるさの山の鹿やまつらむ

107 田里

をのつから田つらのさとは秋の田の
かりほの庵をかけてすむらん

同日當座

108 落露成珠

みか、ても玉とみえけりいさきよき
池の蓮の露のひかりは

109 暮林鳥宿

影ふかきかた山はやし日は落て
ねくらもとむる鳥のこゑく

同六月九日於禁裏御當座百首住吉社御法楽

110 沼蒲

あやめ草かくなかきねのためしをは
いか、あさかの沼にひくらむ

111 瞿麦

みるま、に夕暮かけてなてしこの
はなのまかきの露そす、しき

112 網代

日をへつ、さえ行宇治の川かせに
さてもいく夜かあしろもるらん

113 述懐

月も日もいたつらにのみすくしきて
君につかへん身のわさもなし

同十九日於愚亭月次

114 天香久山

空にほす雲の衣もみしか夜の
月にをよはぬあまのかく山

115 美豆御牧

少す、み
茂みつの御牧はたひ人の
過かてにする駒のみそ行

116 阿波手杜

おもふそよあはてのもりは名のみして
かたみにふかき中の契りを

同日當座

117 夏野

秋にさく花よりさきのはななれや
露をさまよふ野への夏草

118 夏木

あつさをもわするはかりの風の音は
けふ秋ちかくならのはかし葉

七夕伏見殿
119 二星適逢

一とせにせめて二夜もたなはたの
契しあらはうれしからまし

同七月十九日於愚亭月次

120 露

ふるとしも雨はきこえぬ朝きりに
さそなをくらむ秋のしら露

121 虫

す、きちる風のゆくゑになく虫の
こゑもみたる、秋の夕くれ

122 弓

あつさ弓八千代しふへき君か世を
まつおさむるや武士のみち

同日當座

123 野鹿

春日野の春をは余そに秋草の
つまとふ鹿の聲そきこゆる

124 恋涙

いつまでかふかきにしつむ涙川
あふ瀬もしらて恋わたるへき

同八月十五夜公宴御當座

125 嶋邊月

夜もすからさはるくまなき月影を
さそなかむらん沖つ嶋もり

126 月下女郎花

あたにのみ露もをくなりをみなへし
うつろふ月のかけをやとして

同廿八日月次會愚亭

127 初昇月

待出る影は千さともかはらねと
わきて都の山のはの月

128 江上月

みしま江や秋をく霜はあしのはの
露のひかりをみかく月かけ

129 寄月恋

物おもふわか身ならずは袖のうへに
やとして空の月をみましや

同日當座
130 浦月

しかの浦や漕行舟はから崎の
恋をくまなる月やみるらん

131 寄衣恋

待わひて独うちぬるさよころも
かへすくもみる夢そなき

132 袖川筏

筏ちよいかに見るらん袖川は
氷るか月の影のうかへる

同九月廿七日於愚亭月次

133 澤鳴

露こととうつる影をやかそふらむ
野深の月に鳴のはねかき

134 紫菊

はなの色もまつ紫の庭の面に
山路の草の種やうへけむ

135 恋占

いつまでかおもひわたらむはしうらに
いふ事のはの末をたのみて

同日當座

136 秋天象

みるかうちにくもりつはれつ秋の日の
うつるもはやきむら時雨かな

137 秋地儀

天となり地とわかちし時よりも
いく海山のすかたなるらん

138 秋植物

あたし名はよそになしつ、女郎花
袖をく袖のなひくをやみん

—
117

十月廿八日於愚亭月次

139 風前紅葉

ふくかせのさそふそつらき紅の
木々の葉守の神無月とて

140 水落無音

いつのまに氷りそめてか行水の
音なし川の名をは知らん

141 山家送年

とし月はひちを枕に敷妙の
夢に送るもやすき山すみ

同日當座

142 冬夕

暮渡る雲のけしきもすさましく
かせのあとより雪そうちちる

143 恋不依人

あさはかにいひなはなちそたかうへも
わかぬこゝろはふかきおもひを

144 玉津嶋

をろかなる心もみかけ玉津嶋
神のめくみを猶あふくなり

同十一月十日月次愚亭當座

145 松雪

忝か枝の花とやいはん白妙に
けさ一しほの雪の色かな

146 増恋

いかにせは山とりのおのます鏡
みしよりいと、うつるこゝろを

同十二月九日於愚亭月次當座

147 野雪

かりゆかんかた野の道もみえわかて
雪にそたとるけふの鷹人

148 雪中獣

朝夕にかよひなれたるさをしかも
ふりつむ雪に道まとふらし

同廿二日四辻大納言勸進
149 時雨

晴くもる程もあらしのたよりには
又一とをり時雨てそゆく

—
137 137

—
127

享祿二年

正月五日叙
從四位上行内蔵頭兼右近衛権少將藤原朝臣

正月廿九日於愚亭月次會始
鶯是萬春友
春ことに宿になれきて鶯は
いく万代の友とならまし

同日當座
151 早春
しら雪はまたふるとしの空なから
けさを春とや空たつらん

152 聞恋
はつせ山おのへのかねのよそにのみ
さてもいつまてき、わたるへき

153 眺望
見わたせはこと色もなし草の木も
みな白妙の雪のとをやま

同二月十四日於愚亭月次
154 連峯霞
遠近にかさなる峯のかきりさへ
ひとつにかすむ春の明ほの

155 夕春雨
暮渡る空のけしきにかきくもり
さひしさそふる春雨そふる

156 祈神恋
たのみこし日吉のかけのくもらすは
祈る契りのむなしからしな

同日當座
157 處々花盛
世はなへて花より外の木々もなし
わきていつくの里をとほまし

158 鶴立洲
つはさをもかはすのにたてるあしたつ
君かいく世の春にあふらむ

同廿五日於禁裏御當座
159 早蕨
いつのまにもえそめぬらんむらさきの
ちりかとみれば峯のさはらひ

同三月八日禁裏にて花のちりける昔あした一身

160
庭の面にけさた、ひとへふる雪の
にほひにしるき花にそ有ける

161
庭の面に散しく花の色はた、
春に真砂の光とそ見る

162 一昨日まで御千句有
もろ人のつらねし千々の詞にも
立ならふへき花の色かな

同日九日於内侍殿人々當座
163 雨中花
をく露の光をそふる花のうへに
ふりくる雨の色そみえける

同日廿日於愚亭月次
164 尋花
さきそむる花やいつくとしら雪の
まよふ山路を分くらしつる

165 對花
見るかうちに花の光のます鏡
うつる日数も身にはおほえす

166 惜花
と、めえぬならひそつらき散やすき
花をしたへは春もくれけり

同日當座
167 雨中柳
しら露もむすひそへつ、春かせに
なひく柳のいとさめそふる

168 遠恋
とにかくに心つくしそ海山を
へたつる中はおふよしもなし

同廿八日於伏見殿物書會
169 夜梅
梅か、の空にみちすは春なから
さやけき月の影を見ましや

170 後朝恋
かねてより世のことはりとしりなから
なを名残あるけさの別路

171 神祇
たれもその清きなかれを石清水
たえぬちかひとなをやたのまん

同四月十四日於愚亭月次

172 待郭公

つれなさをたれにならひてかくはかり
まつ夜むなしき山ほと、きす

173 採早苗

種まきていくかもあらぬ小山田に
はやおりたちて早苗とるなり

174 寄煙恋

あたなりし人の心のうすけふり
かせのまに／＼打なひきつ、

同日當座

175 窓螢

たか方にならひてかいまとふほたる
あつめぬ窓にすたくなるらん

176 遠煙

雲霧の面影みせてうすけふり
なひくにしるき遠の一むら

同廿三日於公宴太神宮御法樂百首御當座

177 池藤

ふくかせのよせ帰るとそ水の面に
かけをうかふる池の藤波

178 古寺月

いく夜まで暁おきの袖のうへに
またても月をみねのふる寺

179 寄野恋

野を遠みいかにしてかは分いらん
しけりはてぬるわかおもひ草

180 蘆間鶴

むらあしのいくよかこ、にすみぬらん
なれて数そふ友つるのこゑ

同五月十四日於愚亭月次

181 螢

あつめても見へき螢をいたつらに
過るよなく、おしき窓かな

182 霖

晴やらぬ日数おもへは行水も
あさき河瀬の五月雨の比

183 筆

海山のとをささかひも一筆の
あとにしみえぬ心やはある

同日當座

184 夕立早過

みるかうちに風はやみなりあま雲の
よそにそうつる夕立の空

185 人傳恨恋

人めおもふかことに過るつれなさを
わか中たちにうらみてそやる

186 獨懷舊

代々の人つたへし道を思ふにも
なとか身ひとりをろかなるらん

七夕公宴初而被召加御人数

187 七夕草花

庭の面にさき出る秋の花やみな
けふ織女の手向草なる

同廿八日於愚亭月次七月十四日分

188 夏野

一とをり雨ふり過る夏草の
露も涼しき野への夕かせ

189 夏鳥

とふ人をまつの扉の明かたに
しはした、くや水鶏なるらむ

同廿五日公宴御月次懷紙

190 初秋暁風

秋としもおもひもあへぬあけほの、
空よりやかて風そ身にしむ

191 女郎花露

あたにのみむすひなかへすをみなへし
うつろひやすき露にはありとも

192 淨侶暮帰

くる、色もはやすみそめの袖のうへに
月を待えて帰るふる寺

同八月四日於愚亭月次七月十四日分

193 萩風

秋としもおもひもわかぬ萩のはに
ゆふへを風のおとろかすらん

194 原鹿

なをさりにおもふや秋の哀をも
あさちかはらに鹿のなくらむ

164

195 誓恋

神かけてわれもたのまん貴船川
たえぬ契りの末をたかふな

同日當座

196 暁アキ月春静

有明の月をしたへは帰りゆく
かりかねさひし春の明ほの

197 時々會恋

逢みるもなを玉さかにかたいとの
たえぬはかりの中のくるしさ

同六日於東坊城亭當座

198 暁初鴈

なれも又月をやしたふこ、にしも
こし路のかりの有明の聲

199 野霧

いかはかり立つ、く覽むさしの、
かきりもしらぬ秋霧の空

200 山菊

つくりなす庭も山路の菊の花
千とせの露も君やかそへん

同十四日於愚亭月次

201 暁初鴈

くもりなき月にむかへはくるかりの
みえて一すちよこ雲の空

202 湖上月

にほの海やよるさ、なみの数くに
やとれる月の影をしそおもふ

203 獨述懷

たれもそのむかしの道は残す世に
わか身ひとりのまよふくるしさ

同日當座

204 原月

をのつから清きひかりは月影も
みかきかはらの名をやみすらん

205 庵月

ふりまさる柴の庵のしはくも
月はすみける秋のよなく

206 船月

世にひろくいかにすめはか行舟の
かきりもおなし水の月かけ

—
17†

—
16‡

同廿一日於葉室亭當座

207 月前雨

むら雨のふるかうちよりあま雲の
よそに過てそ月もすみける

同廿五日公宴御月次短冊

208 橘

玉すたれへたてしなきはとりとめぬ
はな橘のほひなるらむ

209 橋月

世々かけてみし人のみやかはるらん
月はむかしのまのつきはし

210 寄閑恋

あふ瀬こそよしよとむとも水莖の
たよりはゆるせ文字の閑もり

九月九日公宴

211 翫菊宮庭菊

しら露の玉のみきりに秋をへて
かはらす菊のはなやかさ、む

十一月十日夜於四糸亭當座

212 花衣

散ぬともあかすきてみむはな衣
かへすくもおもふ名残に

213 霧間草花

ふくかせのたより過さてうす霧の
まかきになひくをみなへし哉

214 山家松風

しつかにとおもひいりにし山にたに
すめはうき世のみねの松かせ

十一月十八日於藏人亭當座卅首

215 夜梅

鳥羽玉のやみともわかす梅か香の
けふかくれなき軒の春かせ

216 螢

うつり行草より草の露やみな
きえぬほたるのひかりなるらん

217 時雨

いく度かめくりきぬらむをく露も
またひぬほとに打しくれつ、

218 忍恋

いくとせかふるき軒はの草の名の

—
17‡

219 恨

しのふおもひのみたれはつらむ
よしさらはとひたへてまし中く
うらみんほとのことのはもなし

廿五日公宴御月次
220 海水鳥

にほの海やうら風さむき波のうへに
さそなうきねのあし鴨のこゑ

221 山皆雪

けさみれはかさなる山のおくまでも
夜のまにうつむ嶺のしら雪

222 鞆中枕

敷わひぬ草のむしろに露霜の
まくらはいと、夢もむすはす

二月卅日公宴百首之御當座御人数七人
223 簷梅

吹風のとよりなくともたますたれ
へたてははてし軒の梅か香

224 春曙

わきていまたれかみるらむかすみより
かりかね落る春の明ほの

225 卯花

卯花のさきつ、くやとはしらしきぬに
つ、めるしつかかきねとそみる

226 叢螢

草のはらつらぬきとめぬ玉とみて
すたく螢の影そみたる、

227 秋夕

さらぬたにそのこと、なくうき秋の
夕をむしの音にたて、なく

228 浦月

あまもさそみるめかるらむ田子の
浦のそこさへ清き秋の夜の月

229 水鳥

夜をへつ、波にしほる、あし鴨の
水の床やあかしわふらん

230 寄原恋

うき契り浅茅かはらの露の身は
きえかへりつる世をもふるかな

231 寄草恋

神かけてたのめやをかむ草の名の
あふひまれなる中の契りに

232 山家嵐

おもひいる心しすめは山ふかみ
恋のあらしもしつかかなりけり

十二月五日理覚院勸進先師第三十三回也
233 薬士如蘭得燈
たのもしなくらきやみ路にまよふをも
てらす仏の法のともし火

234 懷舊

とし月もはやくつもりししら雪の
ふるき跡とふことの葉をこれ

同廿五日公宴御月次御短冊
235 郭公

しら雲のはつかにそ聞むらさめの
過かてになく山ほと、きす

236 黄葉

色かへぬ恋もましりてうすくこく
にしきたつたの山の紅葉、

237 樵夫

いりぬへき山路はたえて賤のおか
薪ともしき雪のうちかな

享祿四年八月廿八日宇治平等院釣殿にて一見之次
238
世を宇治とたれかいひけむなかめある
川より遠の秋のけしきを

享祿四年

從四位上行内藏頭兼右近衛権少将藤原朝臣繼花卿

正月十九日公宴御會始
239 鶯有慶音

あら玉の春の千とせをわか君に
かはらす契るうくひすの聲

同廿三日於甘露寺亭百首之當座六人
240 若菜

むらくの雪間をとめてあをやかに
もえ出る野へのわかかなをそつむ

無草案談合等二時半出来

241 早蕨

薪さへをもきかうへにおりそふる
はなこそあらめ嶺のさわらひ

242 苗代

春の雨ふりくらす比はをのつから
なはしろ水を空にまかせむ

243 更衣

けさははや春の名残も夏ころも
ひとへにうすき衫なりけり

244 蘆橋

百敷やなれてみはしの橋の
にほひをしはし袖にうつさん

245 萩

さひしさをとふ人もなき夕くれに
そよそよきたつ軒の下萩

246 月

雲もいま光とそなるくもらすは
はれてさやけき月を見ましや

247 擣衣

夜もすからおきぬの里に衣うつ
きぬたの音そき、てかなしき

248 寒蘆

雪に又花もさきぬとみしま江や
波にかれたつあしのむらく

249 水鳥

床のうへさゆる嵐の衾には
霜をかさぬるをしの毛衣

250 網代

さゆる夜はこの身も宇治のあしろ木に
よりくる氷魚を待そくるしき

251 思

おもふにはいと、わりなし一かたに
つらき人をもしたふ心は

252 苔

むかしたれこ、に住けん庭の面の
石木をふかき苔をみるにも

253 河

よし野川ふかき霞のおくよりも
立こそつ、け花のしら波

20+

254 橋

うちわたす里のたなはしたえくくに
行人みゆる川そひの道

255 懐旧

まなひえぬわか身そつらさふるき世の
をろかなるにも及はぬはなそ

正月廿七日於中御門亭當座二百首 人数九人無草案談合等

256 霞春衣

山姫や衣ほすらむ春のきて
まつたちそむる空のかすみは

257 花満山

白妙の山はそのま、雪にみし
おも影うつす花の色かな

258 残春少

暮て行春しもけふかあすか川
なかれてよとむ日数ともかな

259 採早苗

五月雨のはれ間ありとや小山田に
そてうちはへて早苗とるらん

260 杜夏祓

御祓して帰る杉のす、しさも
はや秋ちかき杜の下かせ

261 原苜蓿

おきいつるあしたのはらの秋かせに
亂れそひゆく露のかるかや

262 里黄葉

たか里もわきてはそめしはつ時雨
た、一しほの紅葉なるらん

263 寒夜月

冬ふかく深行ま、に月影の
色をそへたる霜のさむけさ

264 河千鳥

玉梓の道の川かせさゆる夜は
ところさためぬむら千鳥かな

265 寄車恋

うしとても思ひはすてす小車の
めぐりあはむをちきるわか中

266 寄船恋

いそにのみみるめもかりのうらみにて
つるによるへや波のうき舟

21+

267 田家水

なはしろにせきいる、をやをのつから
田つらの里の庭のやり水

268 津梅^x

さき出る梅の立枝はむかしにも
色香やおなし難波津の春

269 春月

一すちの雲もさはらぬ空にしも
春にはいかておほろ夜の月

270 首夏

日にそへてふかくやならん夏こたち
かけもしけみのもりの朝露

271 郭公

遠かたの雲にきえ行一こゑは
それかあらぬか山ほと、きす

272 沼蒲

あやめ草かくなかきねの生ぬれは
浅香の沼のあさくやはある

273 野萩

しら露の玉も色はへ真萩さく
はなのにしきをしける野へかな

274 路薄

はなす、き道はかた／＼ゆくくと
いつれの人をまねくなるらむ

275 湖月

心をは空にやつりのいとまなみ
月に船さすしかのうら人

276 枯野

かれてしも又一さかりひとつ色に
霜のはなさく野への草むら

277 庭雪

みるやともとふ人あらは跡つくる
それもいとほし庭のしら雪

278 聞恋

音羽川音にのみしていつまでか
あふ瀬もしらてき、渡るへき

279 祈恋

末かけて祈るしをみしめ縄
たえぬ契りは神そしるらん

280 眺望

住よしのうら波とをくみわたせば

22†

21†

二月四日於廣橋亭當座二百首人数八人無草談等
281 名所若菜

あら玉のとしをかさねていくたひか
生田の野への若菜つむらむ

282 帰鴈消霞

かへり行たれこそあらめ天つかり
こゑも霞の空にきえつ、

283 杜春雨

ふるとしもさらにみわかぬ春の雨に
さすかしつくのもりのした露

284 初郭公

山はまた残るかすみの空ながら
一こゑもらすほと、きすかな

285 池上蓮

にこりにししまぬはしるしみるまゝに
心もきよき池のはちす葉

286 苔上露

岩かねにむしかさねたる苔の上や
露をはふかくむすふなるらむ

287 在曙月

またれつる程をや思ふ明てしも
しはしは空に残る月かけ

288 夕木枯

夕まくれもろくちり行木からしに
残る梢のあらむものは

289 月前神楽

をく霜のしろき庭火に影そへて
月もさえゆくあさくらのかゑ

290 嶺初雪

きのふまでしくれし雲のいつのまに
色かへてけさは嶺のしら雪

291 共忍恋

いひ出はわか名やた、むとはかりに
かたみに人もしのふなるらむ

292 遂日増恋

日にそへてしけりもそ行おもひ草
おもひの露を袖にふかめて

293 樵路日暮

なれつ、も道やくるしき暮ふかく

22†

294 餘寒

さかしき山をかへる木こりは
さえ帰るみねのあらしにとけてしも
又や氷りのはるの川水

23 才

295 落花

みな人のしたふもしらて春かせや
あたにし花をさそふなるらん

296 暮春

ひきとめぬならひなからもあやにくに
くれ行春をしたひてやみん

297 早秋

秋といへは昨日にも似す袖のうへに
はや涼しさのかよふ朝かせ

298 秋夕

なれも又かゝるゆふへのうきよりや
涙おとして鴈もなくらむ

299 庭月

つくりなす庭の外には程ちかく
かく海山の月を見ましや

300 池水

立よりてかけみるはかり池の面も
こほれる水の鏡なるらむ

301 寄関恋

こえやらてつらき人めの関をしも
いつあふさかの名にはきかまし

302 寄瀧恋

落瀧つ岩にさはりてしら波の
心も千々にくたくとをしれ

303 暁鷄

おき出てわれは旅行とりかねの
たかきぬくをおとろかすらむ

304 里竹

いく世々かすむ里人に契るらん
かけも千尋の窓のくれ竹

305 山家水

おくふかき山にしあれはかすかなる
かけ樋の水のすむにまかせん

二月廿五日禁裏御月次
306 郭公聲遅

さりともおもふ夜ころも過ぬれば

307 夕初鴈

いつとかまたむやまほと、きす
あかつきの月にこし路のかりかねや
みやこの秋の夕くれの空

308 狩獵

かり人はいつはたつみもしらま弓
やもてゐる野に身をわすれつゝ

二月廿六日於四条亭當座二百首
309 梅のはな
(歌欠)

310 ちたまやなき
(歌欠)

25 才 24 才 24 才

三月廿五日公宴御月次
311 花浮水

よし野河なみにさきそふはななれは
ちりての後もあたにやはみる

312 暮春月

ほともなくくれ行春は月もいま
名残やしはしあり明の空

313 鶴帰臯

君にいまいく千とせをか契りをきて
かへる深邊のひなつるのこゑ

25 才

四月二日於飛鳥井亭哥鞠張行
314 庭花春久

立ならふ姿をためしに庭の面の
はなもちらてや世々の春かせ

同十三日万里小路勸進
315 河蛭

こよひなを河の瀬みれはしら玉の
数そふ物はほたるなりけり

316 述懐

しらしかし誰もうき世といひなから
かくすみかたきわか身なりとは

同十五日於東坊城亭當座二百首無草案談合等
317 鶯稀
春とてもまた谷の戸やさむからし

都にうとき鶯のこゑ

318 花

うら山し梢になる、蝶とりは
いく木のはなをあかすみるらん

319 紫藤

水の面に影をうかへてむらさきの
色にもなりぬ池の藤なみ

320 竹亭夏来

春もまたまちかき窓の呉竹の
葉分のかせはけさそ涼しき

321 昌蒲
マツ

をのつから賤か軒端はかりてふく
あやめの草のいほりならずや

322 露脆
モロシ

やよしはしむすひと、めよいとす、き
もろくちり行露にはありとも

323 古寺秋夕

とひたえし夕は分てうき秋の
うらみもさそなしかのふる寺

324 故郷鶉

あれにけり身にしむ露のふる郷も
いまはうつらの床のさよかせ

325 雪

かならずは友をもまたしとはるへき
道もなきまで雪そふりしく

326 秋夜恋

なかしとは人をまつにやおもふらん
あふ夜のほとは秋としもなし

327 暮春恋

と、めえす春も程なくくれなるの
きぬくつらき袖のうへかな

328 鶴聲近枕

いくとせもなれてこ、にやよるのつる
まくらにちかく聲のきこゆる

329 寄暮祝

文にます何かはあらむおさまれる
代々のためしを今もしるには

330 春月
又

いつみるもおなし雲の月なから

┌
26 ♪

└
26 ♪

かすむを春の光なるらむ

331 野若菜

春ことの若菜をとめて賤のめは
はやいくとせを野へにつむらん

332 夏草

むら雨のあとより露もうちしけり
分いりかたき野への夏草

333 嶋月

ほのかなる光をみれはうす霧の
まかきの嶋の秋の月かけ

334 夜虫

秋の夜のななきかきりをなくむしは
いかにつれなき友を待らし

335 歳暮雪

月も日も暮ぬるとしはふりつもる
雪のうへをもこえて行らん

336 不逢恋

わか方になひくすかたはなよ竹の
一夜のふしもなといとふらん

337 後朝恋

わりなしやうききぬくを思ひぬ
又ねの床は夢もむすはず

338 懐旧

たれもさそいまおもふらんふるき世の
人をもおなじまははりもかな

┌
27 ♪

339 故郷雨

ぬしやたれ晴やらぬ雨の故郷に
軒もる露そあるしかほなる

同四月廿五日公宴御月次

二首分アキ

後五月廿五日公宴御月次

340 月

いつはあれとけふたくひなき光もて
雲もさはらぬ秋の夜の月

341 氷

忝かせの聲のみ落て瀧川の
すゑはこほりに行水もなし

342 怨恋

あたなりし心をかせのまくすはら
かへすくも何たのみけむ

同日於中御門亭當座無談合

343 山市晴嵐

山かせはしはしよはりてさはきたつ
こゑやまもとの里の市人

344 遠浦帰帆

程なしやこき帰る舟のほのかにも
みるくこ、にちかき浦人

345 煙寺晚鐘

入相の聲はかすかにきこゆれと
そこともわかぬおくのふる寺

346 瀟湘夜雨

うきふしをおもふ枕のなみたもや
袖よりあまる夜半のむらさめ

347 漁村夕照

夕にはさして入日も影そふや
あまのすむてふ里のいさり火

348 平沙落鷹

よそに行友やよふらんみるか中に
数はまさこの秋のかりかね

349 洞庭秋月

浦かせの身にしむ秋のよなくに
とつる氷や清き月かけ

350 江天暮雪

暮渡る入江をとをみ白妙の
波かとみれば雪そうちゝる

九月廿二日於中院當座

351 秋田

さひしさやひとり庵もる秋の田の
かりかねちかきあかつきの空

352 暁霧

残る夜の色かとみれば明ても
霧のまよひにわかぬ空かな

353 忍恋

契りしはうつともなし夢かとも
わかぬはかりに月日へにけり

同廿三日月待於吉田侍從亭當座

354 待月
こよひ月まつかひあれな秋のかせ

27

355 嶺雲

たかねの雲ははらひつくして
しひてなをあかね心に春やきぬ
花やさきぬ嶺のしら雲

356 祝言

天照神代のまゝに家のかせ
吹つたへたる道そかしこき

同廿五日公宴御月次

357 遠村卯花

はるく、としら波かけて河かみの
里のかきねにさける卯花

358 田家霧

賤かすむ門田の稲葉ほのく、と
あけてもくらさうす霧の空

359 寒庭霜

色ふかき木の葉散しく庭の面も
けさより霜の白妙にして

同廿八日夜於官務
360 春雨
伊治亭百首當座人数六人

かきくもる空かとみれば春の雨の
ふるき軒端のしづくにそしる

361 早蕨

いかなれはおもきかうへに山人の
染おりく、の峯のさわらひ

362 卯花

月にみせ風にさらせるしらきぬに
つゝむかきねやさける卯花

363 氷室

世はなへて春みし雪もみな月に
残るはいかに氷室もるらむ

364 泉

あつき日も心はとけてむすふ手の
しづく涼しき泉ならすや

365 鴈

うき秋の夕を鴈も鳴て行
涙やをちの野へのしら露

366 虫

いと薄よるく、をけるしら露や
はたをる虫の涙なるらん

28

28

367 寒蘆

春風につのくむあしのをく霜に
かれたつも又よしや世中

368 網代

いとまなきわさのみ宇治の網代木に
よるをもかさね日をや送らん

369 初恋

うらもなく思ふかひなし初草の
また結ひえぬ露の言の葉

370 松

時雨にはつれなかりしを雪にけさ
まつ一しほの嶺の恣か枝

371 懐旧

おもふそようき事のみのみす鏡
くもらて過し人のむかしを

372 祝

君も臣もひとつ心におさめしる
代はうこきなき時そかしこき

十月十三日於中御門當座

373 時雨

晴くもりさためなき世のことほりを
そらにみせたるむら時雨かな

374 寄日恋

たへてこしつらさをいかに夕附日
さしてうらみん言の葉もなし

同廿五日公宴御月次

375 落葉深

さそひこし風のまに／＼色みせて
庭も山路の木のはちるなり

376 尋千鳥

鳴て行かたやいつこの浦ちとり
とへは跡なきかへるしら波

377 名所山

へたて、やおもふ越路のそらもけさ
都にしるき雪のしら山

同廿九日於甘露寺當座

378 霰残夢

たまあられさやくあらしは夢の中の
夢やおとろく枕なるらむ

379 杜神楽

陰ふかきもりの柳葉おりにあひて
神もいさむや本末のこゑ

380 霧中春

春ふかく旅にはゆかむ里つらき
山河も花のかけにやとれは

十一月四日夜於中御門

坊城泉□□
二人之作詩予和韻

381 雪裡探梅

春をまつ色とはしるしさき出て
梅か香たとる雪のはつ花 韻字花

同十日於伏見殿御張行

遣逢院點
鐘の聲とりのなく音もうつもれて
雪ふか、れや暁の空

383 朝雪

朝戸明てすたれをまけは四方も猶
みる／＼ちかき霽の山のはの雪

384 夕雪

ふみ分てとひくる人の夕つくひ
さしもえならぬ庭のしら雪

385 夜雪

くれ竹のよのまにつもるしら雪を
みよとやつくる下おれの聲

386 山雪

大ひえやをひえの山の名もたかく
都のふしの雪をなかめて

387 都雪

所からこ、は都の玉のちり
玉のみきりにみかきなすらん

388 恋天象

うき秋の涙になりぬ露しくれ
わか身ひとつの袖をもとめて

389 恋地象

色かへぬならひを何とあさはかに
おもひ岡への恣のうへの露

390 雑植物

をのつから人しとはねはわか宿も
蓬むくらのしけき庭かな

29†

29†

30†

30†

391 雜動物

陰ふかき山ならねともさひしきは
ましらなくなる夕暮のこゑ

同十一月廿五日公宴御月次

392 納涼

むすふ手の水こそあらめ山の井の
月に待とる風の涼しさ

393 鹿

うき秋の涙くらへんわれもいま
鹿の聲よりあはれそへつゝ

394 寄雲恋

よ所にやはかくまで人はしら雲の
たち別うきさきぬくの空

395 海路

見わたせはさしてしるへも浪のうへに
往來の舟の道をしそ思ふ

同廿七日於官務亭興行

396 郭公

むら雨のたより待えてしら雲の
はつかにそきく山ほとゝきす

397 千鳥

松か枝のあらしをいへは雪に又
真砂地さむみ千とりなく也

十二月十日於中御門亭當座

398 冬木

春やきぬさむき木すゑのしら雪を
色にもさける庭の梅かえ

399 冬契

この暮とたのめし物をあやにくに
道なきまでも積る雪かな

十二月廿五日公宴御月次

400 炭竈

みるかうちに消るあらしのうき雲や
けふり吹しく嶺のすみかま

401 歳暮雪

かひなしや積れるとしもけふに暮て
あすよりやかて春のあは雪

402 砌忒

陰たかくなれてみきりの忒なれば
君かいく代のためしをかしる

享祿五年

改元

從四位上行右近衛權少將兼内蔵頭臣藤原朝臣言繼花

正十五公宴御會始

403 每山有春

春のくる色とはしるし四方のそら
みながら山はうちかすみつゝ

二十六中御門月次會始

404 梅有佳色

さき出る色香をみればいく代々の
生さきこもる宿の梅か枝

同當座

405 河邊柳

さなからに水のみとりも青柳の
いとくり出す川かせそふく

406 寄衣恋

とひくるもいかゝたのまむはな衣
うつろひやすき心なりせは

407 渡舟

所せきゆく人しけし渡しもり
さしかへる舟のひまもなきまで

二廿二日於愚亭當座

408 梅

をろかなる梢なからもみる人の
なさけことはる梅かゝそする

同廿五日公宴御月次

409 聞郭公

心あれや待し日数のうらみをも
鳴てことはる山ほとゝきす

410 岡紅葉

さらに猶光をそへて夕つく日
さすや岡への木々の紅葉、

411 閑中雪

夕まくれ音するとても下おれの
聲のほかなき雪の山さと

同廿五日公宴御當座御連哥之後

412 野雲雀

雲にいり霞にきえて床しめし
野は露ふかき夕ひはりかな

317

314

324

三二日於公宴御當座卅首花之下御會
413 夕花 庭の面は露をく花のひかりより
空もしはしは暮残るらん

414 寄花久恋 別しは程ふる春のおもかけの
年いくかへり花にこふらむ

同九日於四条中将亭張行

415 花下送日 あかなくにちるともよしや昨日より
けふよりあすの花にくらさん

416 月前秋風 わきて猶光やそはん雲きりも
をよはぬ月に秋かせそふく

417 寄木恋 あひおもふ心なりせは契りをか
枝をつらぬる木々をためしに

同十日於飛鳥井亭當座懷紙

418 花契多春 いく春か契りをきけむ庭の面の
花も常磐の姿をためしに

同十二日於藏人亭當座花見

419 花雪 (歌欠)

420 寄花祝 (歌欠)

四月十二日於中御門亭月次當座

421 朝更衣 程もなく霞のころも立かへて
ひとへにす、し袖のあさかせ

422 郭公遍 一聲にかくはあらしなたれもけさ
きえつ、かたる山ほと、きす

423 不逢恋 同廿五日公宴御月次

424 梅雨 晴やらぬ日数おもへはこの川の
水かさすくなき五月雨の比

327

425 別恋 又こむとたのめをかすはわかれきて
さてもいのちのあらむ物かは

426 蕭寺 世中のうきをいとひてむかしたれ
すみし心のおくの古寺

六月廿八日於中御門亭當座月次

427 夏木 むらさめや茂る柳の一木より
露の玉まく風の涼しさ

428 夏恨 きてとふもみしかき夜半のさよ衣
かへすくもうらみ侘つ、

429 夏祝 夏なから夕かけ草の世ははやく
君になひかむ風やふくらむ

七夕公宴
430 織女風為扇 をのつからす、しくもあるか彦星の
ならず扇に秋のはつかせ

同日伏見殿
431 寄月祝七夕 いくめくりかはらぬ月のひかりにも
たのめかをきし星合の空

同日中御門亭當座
432 織女契久 いく代々の契りなるらんひこほしの
行すゑも猶かきりやはある

七月廿五日公宴御月次

433 萩漸盛 さき残るかた枝はありて一もとも
ちるとはみえぬ野への萩はら

434 鹿聲繁 露なみたしけさやまさるさをしかの
峯にも尾にもつま恋の聲

435 後朝恋 契りをく夕かけ草もたのまれす
うつろひやすき露のかことは

同廿七日於中御門亭月次兼日
436 田上稻妻 きえやすき露をみせつ、秋の田の

337

338

稲葉の雲になつまのかけ

437 草花色々

心ありて露もみえけり秋草の色をつくせる花のまかきに

438 山中瀧音

峯たかみ石にさはりて落瀧つ波のひ、きも山とよむまで

同日當座

439 初秋朝

秋きぬ(ひと)思ふ心や引かへてはや涼しさの袖の朝かせ

440 寄玉恋

袖のうへにをくてふ露のしら玉のきえかへりつ、思ふくるしき

441 霧中衣

旅衣なをそしほる、露霜のおきふし野へのかり枕して

八月十七日甘露寺祖父親長卿卅三回勸進
442 分別功德品

もらさしの誓そふかき身をかへて人にをしへの法のかしこさ

同日中御門月次會兼日

443 秋の月

いつよりもわきてことしはくもりなき秋の光や望月のかけ

444 こたか

はし鷹をすへ野にけふも打むれて鳥ふみたつる秋のかり人

445 心かはる

あすか川きのふの溯もいたつらにけふは瀬になる心もそうき

同當座

446 野月

分そむる光もしるし大え山いく野の草の露の月影

447 寄月逢恋

限あれはうはの空ゆく月かけも又めぐりあふたよりうれしも

448 月前述懐

おもふには花も紅葉も何かその

34†

月に真砂の秋の海はら

同廿五日公宴月次御會

449 三月盡

けふに暮て春はあすより夏木立それもかたみと猶やなかめん

450 紅葉浅

昨日けふしくる、山のうすもみちかねて千しほのしるき色かな

451 寄虫恋

まつといふをとへはこたへぬ虫の音をなをこりすまにしたふはかなさ

九月九日公宴

452 菊送多秋

をく露もけふいく秋のきくのはなさか行君か代々の数かも

同廿五日公宴御月次

453 紅葉

むら時雨ふりそむるよりいかにそめてか紅葉しつらむ

454 暮秋

長雨の名のみよいかに夕日かけうつりやすくも秋そくれ行

455 尺教

一すちに猶たのむかな二なく三なきとく法をきくにも

十月八日於愚亭人々當座通題

456 月前落葉

さゆる夜の月に窓うつむら雨や風のさそへる木の葉なるらん

同十六日中御門月次當座

457 冬月

をきわたす霜もさなから影しろき月の光の有曙の空

458 眺望

けさよりは秋のにしきを立かへてた、しらきぬの雪の山のは

同廿二日於伏見殿御會

459 時雨易晴

しくれては晴ぬる雲のいく度か

35†

34†

往来をさそふ木々の山かせ

同廿五日公宴御月次

460 海郭公

ほと、きす夢かあらぬか沖つかせ
あら磯波のうつ、ともなき

461 渡霧

わたし守さしていつくにゆく舟の
さかひもみえぬ夕霧のそら

462 負恋

つれなさの心くらへもさすかいま
若木ならぬをみるかうれしき

十二月廿五日公宴御月次

463 菴五月雨

とふ人の道さへ絶てしけりゆく
草のいほりの五月雨のころ

464 暮秋露

けふのみの名残もふかき秋の色を
四方の草木の露にみせけり

465 寄朽木恋

しれかしなすてははつとも年をへて
しはし朽木のくちぬおもひを

天文二年

從四位上行右近衛権少将兼内蔵頭藤原朝臣花押

正十九公宴御會始

466 初春祝

二葉より子日の松を引うへて
千とせを君か代にやかそへむ

二廿五公宴御月次

467 郭公稀

たまさかのた、一こゑはむら雨の
行ゑもつらき山ほと、きす

468 隣紅葉

へたてなき色をかはして里つ、き
隣とみるも庭のもみち葉

469 述懐

あかすのみ又もみてましか梅さきて
月かすむ夜の春のあけほの

— 35 —

御會

同日御法楽御連哥後御當座

470 苗代水

いく春もしつか門田にひくしめの
なはしろ水そたへすなかる、

471 被忘恋

いまそ思ふしのふと
あたにしも思ふといひしことの葉は
忘る、草の種にや有けん

同廿九日廣橋勸進春日法楽

472 擣衣幽

かせのつてにそれかとはかりき、しより
又一しきりうつ衣かな

同三廿五公宴御月次

473 松藤

まつやまの松ならなくに春ことの
花そ梢をこゆる藤なみ

474 暮春

花鳥も余そにうつりて行春を
あかぬ心に猶したふかな

475 忍恋

わりなしや袖にいつよりしのふ草
忍ふにあまり露は置らむ

同五月廿五公宴御月次

476 五月雨久

たえく／＼に水行川も日にそひて
底井しられぬ五月雨の比

477 瀬鶉河

出そめて波にうつろふ月影は
さそな鶉舟の瀬々の篝火

478 鞆中枕

みる夢もあらし吹なり野への露
結びもとめぬ草の枕に

同七廿三於尾州勝幡織田三郎信秀亭會紙

479 早秋風

秋きぬといふはかりにそきのふけふ
そよや軒端の荻のうはかせ

480 杜頭祝

みかさ山四のやしらの影やすく
おさまれる世は神のまに／＼

同九九公宴

— 36 —

— 36 —

481 園深菊更栄 ソフカワメキサラニサカク
いつはあれとわきてことしは花の香も
ふかき園生の菊の色く

天文三正十九公宴御會始

492 鶴宿松樹 スズメノキ
おさまれるいく世の風かまな鶴の
なれてすむらむ松の木たかさ

同十廿五公宴御月次
482 五月雨
みし月の面影もやは有明の
つれなくはれぬ五月雨の空

同閏正十一愚亭月次會始

493 多年翫梅
世々をへて色香もそふ梅のはな
なをいく春のかさしならまし

483 雪
さらぬたにとふ人もなき雪の日は
ことほりふかき山のおくかな

484 田家

秋過る山田の庵はあめ露の
もるより外に音信もなし

同日當座
494 早春

春はまた浅深をの、雪の色も
そのま、かすむ四方の山のは

同十一廿五公宴御月次
485 行路雪

雪のうへに跡つけそめて行まゝに
道なき方も道はありけり

495 窓竹

かりそめにいく世かこゝに住なれし
陰をふかむる窓のくれ竹

486 年内梅

さもあらぬ余所の梢の冬木にも
梅か、はかり春やしるらん

同十五日ヨリ於中御門亭百日着到
496 立春

山の端のかすむとみるもいひなしの
心よりまつ春やたつらん

487 忘久恋

おもふには人もつれなし忘れて
いつのまゝにかとはれざるらん

同十六日
497 朝霞

横雲の名残やしはし有明の
月をはよそにたつ霞かな

同十二廿七公宴御月次
488 砌橘

橘のちかき軒端はをのつから
またてもきくや山ほと、きす

同十七日
498 谷鶯

山ふかみ氷(〇も)とつる谷の戸を
春に明ぬときなくうくひす

489 濱菊

たつ浪やたえす吹上のはまかせに
なひくとみえて匂ふしら草

十八日
499 残雪

さえ帰る山はあらしにくる春の
心もとけぬ峯のしら雪

490 残鴈

鴈もさそこし路の空の面影を
都の雪に思ひ出らむ

491 顕恋

と、めえぬ涙そつらき忍ふにも
あまるおもひのよそにしれつ、

37+

37+

38+

天文三年

廿八才
正四位下行右近衛権少将兼内蔵頭臣藤原朝臣仲

同廿四日公宴御當座
501 草花早

さきそむる千種の花のなかめより
おくある秋の野への色かな

十九日
500 若菜

ひくま、になかきねせりはいく世々の
春をかつめる若菜なるらん

502 名所浦

ひろふへき玉をなきさにたとる身は
おもふもくるしわかかの浦なみ

503 里梅
廿日

わか方にたか里わかすさくといは、
梅か香さそへ春の山かせ

504 簷梅
廿一日

世はなへて梅か香なれやすたれまく
夕えならぬ軒の春かせ

505 春月
廿二日

かすみてはさはらぬ雲もさはるか
とおほれする春の夜の月

506 春曙
廿三日

雲かすみなに、たとへん色としも
わかぬなかもや春の明ほの

507 歸鴈
廿四日

帰るかり都のはなのおもかけは
のこるこし路の雪にたにみし

508 夕立
廿五日公宴御月次

こぬ秋の露をもみせて庭の面は
涼しくなりぬ夕立のあと

509 寄雲恋

行かへり心は空にうき雲の
うき名はかりを身の契りとや

510 瀧水

君か代の数にやとらむおち瀧つ
千々にくたくる水のしら玉

511 餘寒
同廿七日愚亭月次兼日

さえ帰る岩間の水の春の色は
またうちとけぬうす氷かな

512 契恋

かりそめの此身はかりは何ならず
世々の契りを人にたのまん

38

同日當座
513 春雉思子

なれもその子を思ひてや世は春の
人の往来にき、す鳴らむ

514 雨後苗代

春の雨の名残にせかぬなはしろも
水を心にまかせてやみる

515 浦霞
同廿八日夢想勸進伊与局ヨリ伝不即之人

なかむれはかすめる波のひとつ色に
千さとをこむる浦の夕なき

516 紅葉

露霜のいかにをけはかうすくこく
そめぬもまじる紅葉なるらん

517 春雨
同廿五日

ふるとしもわかぬはかりに霞より
落るしつくや春雨の空

518 岸柳
同廿六日

きしかけの水のみとりも青柳の
春かせなから影をうつして

519 待花
同廿七日

待わふる花にはいかてあやにくに
さえかへる春の日数そふらむ

520 初花
同廿八日

めつらしき色をみよとや春かせに
けさときそむる花の下ひも

521 見花
同廿九日

たれか今来て帰らましまるかうちに
花もさきそふ月の夕かけ

522 花盛
同卅日

にははすは花ともわかし常磐木も
立かくさる、峯のしら雲

二月一日

39

523 落花

ほともなくちるをしたひておもふには
た、夢のまの春のはなかな

同日
524 款冬

をく露も色をそへつ、まかきより
こほれてさける山吹のはな

同日
525 池藤

松のうへの花こそあらめ池水に
又かけみせてさける藤波

同日
526 暮春

しはし又ことしくは、る春たにも
くる、ははやき名残をそおもふ

同日
527 梅

（人々）梅見待る時に當座
ときはなる松をためしに十かへりの
春もさかなん庭の梅か枝

同日
528 更衣

蝉のはのうすき衣に山ひめの
かすみの袖もけさやかふらん

同日
529 卯花

時ならぬ雪かと所思ふ夕間暮
かきねにしろくさける卯花

同日
530 待郭公

ほと、きすわれもつれなくまつ比は
心みしかき夜半にしもなし

同日
531 聞時鳥

夕間暮まち出けりな山のはを
さしのほる月になくほと、きす

同日
532 時鳥稀

たか里を今はとふらんほと、きす
われにはうとく音をもらしつ、

同日

533 故郷橘

ありし世に色もかはらすふる郷の
むかしもいまに匂ふたちはな

同日
534 早苗

うへわたす田面涼しき露の色に
こぬ秋みゆる早苗草かな

同日
535 五月雨

この比はふるかひありて五月雨に
あらぬ瀧おち水はしる也

同日
536 鶺鴒河

簞たくいとまも波にうかひみて
なる、わさしも鶺鴒なるらん

同日
537 叢螢

夏むしはいかに草葉もしけくなる
おもひありてか身をこかすらん

同日
538 夏草

色々の草の中よりさき出て
秋にさきたつなてしこのはな

同日
539 夏月

まきの戸は月の光もさしなから
そのま、あくるみしかよの空

同日
540 夕立

夕立はむら雲さはきふりくるも
程なくよそになる神の音

同日
541 杜蟬

立よりし杜の木陰はしつくなき
雨やとりなるせみのもろこゑ

同日
542 夏祓

あつさをも忘れてはやくうき事は
けふみな月のはらへをそする

同廿日愚亭月次兼日

40

40

543 遠尋花

色も香も袖にうつして雲かすみ
かさなるはなの山路をそ行

544 花下友

まてしはし帰らんとても月日なる
花にはいか、春の友とち

545 惜落花

ちる花をいかにしたは、梢にも
帰らん物か人そあたなる

同當座
546 桜

春もなを月と雪との折はあれと
何をさくらのうへにかはみむ

547 恨

色にしも中く出し言の葉に
いひつくすへきうらみならねは

同廿日
548 早秋

(歌欠)

同廿一日
549 七夕

(歌欠)

同廿二日
550 萩風

(歌欠)

同廿三日
551 萩露

(歌欠)

同廿四日
552 女郎花

(歌欠)

同廿五日公宴御月次
553 花色映月

月もいま影さしそへてくもりなき
光をはなのますか、みかな

554 無風花散

時ありてうつろふをなとうらみけん
風ふかぬまも花はちりけり

555 忍經年恋

年ふれはあらはれやせん名とり川
おもひにしつむ瀬々の埋木

417

417

同廿五日
556 夕虫

(歌欠)

同廿六日
557 麓鹿

(歌欠)

同廿七日
558 初鴈

(歌欠)

同廿八日
559 秋夕

(歌欠)

同廿九日
560 山月

(歌欠)

同卅日
561 野月

(歌欠)

天文三三二日
562 河月

(歌欠)

同二日
563 江月

(歌欠)

同三日
564 浦月

(歌欠)

同四日
565 籬菊

(歌欠)

同六日於飛鳥井亭會始
566 椿葉契久

契りをくいく代の霜をかさねてか
しら玉椿春にあふらむ

同日當座
567 野春駒

世は春の色に成てそいさみある
心のみする野へのあら駒

568 山家竹

夏冬も何にかはしる山さとは

427

千尋あるてふ陰のみにして

同五日
569 擣衣

(歌欠)

同六日
570 暁霧

(歌欠)

五首分アキ

同廿日月次會兼日

571 山田苗代

雨晴る夕しつかに苗代の
水せきいる、春の小山田

572 漁夫出浦

なかき日も海原とをく漕出て
いとまや波のあまの釣舟

同日當座

573 浅

おり／＼の花よ月よと移り来て
あさきそ人の心なりける

574 濁

人よなとすみ侘ぬらん行水も
にこらぬ物をにこりたる世に

数行アキ

同廿五日公宴御月次

575 江五月雨

さそなうき鶉の床も水まさる
まの、入江の五月雨の比

576 往事夢

思ひしるゆく末も又いかならん
過こし方は春のよの夢

天文三四廿一愚亭月次當座

577 夏月易明

みるかうちも程なき月に真木の戸を
さ、てそのま、明る夜の空

44 才

43 才

43 才

42 才

578 樹陰納涼

あつき日はす、みとるてふ人もなを
しけき木陰に風や待らん

579 瀬鶉河

さして行舟もかす／＼大井川
みれはいく瀬の篝火のかけ

同廿五日公宴御月次

580 葵露

雲の上やみとりのあふひけふことに
いく世をかけて露の置らん

581 夕時鳥

いひ出ん言の葉もなし月ほそき
夕の雲に山ほと、きす

582 瀧水

おち瀧津石にくたくる白玉は
なかる、水に数やとるらん

同五廿五公宴御月次

583 更衣

花そめの霞の袖も立かへて
春の名残は夏衣かな

584 関月

影あかぬ空にもしはし深る夜の
月をと、むる関守もかな

585 離別

故郷の名残ならても旅にては
行あふ友の別路もうき

44 才

同六二公宴御當座

586 夏草隠路

夏草のをのかさま／＼茂るより
道は野山もわかぬ色かな

587 片恋

岩木なる心そつらきしれかしな
おもふいへはおもふならひを

同十五日愚亭月次去月分

588 梅雨

(歌欠)

589 閑暁

(歌欠)

同日當座
590 夏煙

蚊遣たくしつかすまゐのいふせさを
よそにしらせてたつ煙かな

591 夏野

野を遠み茂るまゝなる草の中に
ひとりさゆりのをのか時なる

592 夏玉

光ある水の螢は難波江の
藻にうつもれぬ玉とこそみれ

593 夏懐

立さらはよそにあつさや覚えまし
むすふ岩井の水の涼しさ

同日(〇六) 廿四愚亭月次會
594 泉

(歌欠)

595 扇

(歌欠)

596 恨

(歌欠)

同日當座

597 軒蘆橋

折にあひしむかしの人の袖の香を
そのまま残す軒のたち花

598 納涼急夏

涼しさは秋や立らんとはかりに
夏をはよその杜の下かせ

599 限身恋

つらしとも何うらみけんうらみても
人よりこゝろあさき我身を

同日又當座

600 夏月

くれ竹のふしのまもなく明にけり
月みるほともしみしか夜の空

天文三六廿五公宴御月次

601 鵜舟多

程ちかくなるにそしるき大井河
すたく螢は瀬々の篝火

602 山納涼

行やらす山河は木々の下陰に

45

45

603 人傳恋

立ましらはてあつき日もなし
哀しれ人つてのみはかくはかり
おもふとたにもつけぬ心を

同日御當座公宴

604 嶋夏草

見わたせは茂りあひたる夏草の
みとりになみのうき嶋かはら

605 山家人稀

こゝかしこすむ山さとははれんも
とふへき人もあらぬさしき

七夕公宴

606 今宵織女渡天河

としことに天河なみたちぬる、
袖もこよひやほし合の空

同日中御門張行

607 織女契

彦ほしのいかに契りてあまの河
けふのこよひの舟出なるらん

同日當座

608 七夕

いく世々かめくりあふらん小車の
牛ひく星のけふの契りは

46

天文三七廿五公宴御月次

609 初鴈

程なしや帰りし春のおも影も
霧間にちかき鴈の一つら

610 閑中雪

とはるへき松のあらしの音までも
雪のそこなる山のさしき

611 述懐

おもふそよ波のさはきは音たへて
都の花の春にあふ世を

同三八廿五公宴御月次

612 月前閑鴈

あかなくのはしるしつけくすむ月に
かりかねさゆる明かたの空

613 月下擣衣

月のみ心はしつかあさころも

614 月旅宿友
夜さむ忘れていか、うつらん
かり枕いふせき床はをのつから
ねられぬ旅ね月にあかしつ

天文三重陽公宴

615 黄菊泛ウキハフサカキニ觴

さか月の光をそへてみる菊は
世々にさか行色香もある

同三九十三公宴御當座

616 岡上月

かねてよりたれも心にこよひをや
おもひ岡への月はすむらし

617 河上月

あかなくも河邊はるかによもすから
舟さしくたす波の月影

618 禁中月

君か代の光をそへてみるか内に
影てりまさる雲の上の月

619 月前雞

月影のさえ行ま、に天の戸や
明かたたとる鳥の鳴らむ

620 寄月眺望

なかめやる伏見の深田はるくと
月に晴行うす霧の空

同三九廿一愚亭月次兼日

621 霧中鹿

さを鹿のおなし尾上のうす霧に
立へたて、や妻こひのこゑ

622 海眺望

はるかなる浦半の海のよるへなく
漕出る舟よいつち行らん

同日當座

623 秋山

夕くれの山路の秋のさひしさを
ひとりと鹿の音にたて、なく

624 柿

君か代のめくみをうけて柿葉の
さか行かけもときは堅磐に

同三九廿五公宴御月次

625 濱五月雨

五月雨に水かさまさりてはま姿の
梢を浪のこすかとそみる

626 隣紅葉

となりともいか、おもはんなかきも
わかす枝こす木々の紅葉、

627 厭恋

何ゆへにとさまかくさまかこと、て
かくまで人のいとひはつらん

同三九廿八中御門亭當座

628 菊露

はらはてや露なからみむ移しうふる
種は山河の庭のしら菊

629 麓柴

嶺たかみふもとはこふなら柴の
かれてもかゝるわさやくるしき

同三十廿三月次會兼日愚亭

630 落葉隨風

時ありて落る木の葉はさそひ行
風なしとても残るましやは

631 夢中途恋

したひわひ逢見る程も夢ながら
うき衣くのおなしね覚を

同日當座

632 江寒蘆

そよきたつ風もさむけししま江や
あしの葉しろくをける朝霜

633 會恋

別路をかねておもへは新枕
涙かはらぬ袖のうへかな

同三十廿五公宴御月次

634 落葉

とふ人もいか、わけまし散ていま
錦をしける庭のもみち葉

635 千鳥

よもすから浦かせさむみ聲はして
跡をもとめす千とりたつ空

636 馴恋

何ゆへか手なれの駒の引にしも

人の心のあれてみゆらん

同三十一 廿五公宴御月次

くれて行春をかきりの花しあらは
いかはかりなをけふをしたはん

638 湊千鳥

おきつかせなをさむからし夜もすから
みなど入江に千とり鳴なり

639 寄杜恋

かくとたにいはての杜のいはてのみ
しけきおもひに年をふるかな

一首分アキ

天文四年

廿九才 正月二日 轉中將

正四位下行右近衛權中將兼内蔵頭藤原朝臣花

天文四四二 甘露寺ヨリ被申上原左衛門大夫勸進

640 紅葉

へたてなき(以下欠)

七七於中御門亭當座

641 織女契

彦ほしのとしに一夜も千々の秋
たえぬいく代の契りなるらむ

同於中御門亭月次會始

642 緑竹不辨秋

(歌欠)

同當座

643 見萩

さく花のへたてもあらし秋はきを
うへつ、こゝに宮城の、はら

644 八月

うすかりし光をそへてみるか内に
はや山のはの三か月のかけ

645 嶺雲

むら雨のふるかとすれは程もなく
峯行雲にうつる日の影

同四八、

646 法師功德品

唯獨自明天

ふくとなき嶺のあらしに空晴て
ひとり心の月そすみ行

同四重陽公宴

647 露光宿菊

はらはてそ色香もふかき秋をへて
さきそふ菊の花のしら露

同四十一、

648 雪埋松

はらひつる雪の色かは下枝さへ
むもれはてたる松かせのこゑ

649 神樂

絲竹のそのしなくの聲たて、
す、む庭火の影そふけ行

650 初逢恋

うれしきも又うきふしにいひわかす
涙あやしき新枕かな

同四十二、

651 早梅

ふりつみし雪もそのま、花の色に
春まで匂へ梅の一枝

652 恋月

わりなくもいく夜をた、に有明の
つれなさのみを面影にして

653 雲

いく度かみるか内かも行かへり
峯こす雲のうちしくるらむ

一首分アキ

天文五年

天文五五、於柳原亭當座

654 春月

るりの水に影うつせとも時ふりて
かすめはかすむ春の夜の月

655 浅茅露

とにかくになひきあひつ、あさちはら

48 48

49 49

49 49

656 も通書恋

をくてふ露はかせのまに〜
もろこしの吉野とてしもへたてなき
心にかはす水莖のあと

657 か燈

かす〜のことかたらひてよますから
人をあまたのともし火のもと

同五五、
658 寄雲恋

あたにのみなしもはてなてかゝる身の
うしや心は空のうき雲

同五七夕公宴
659 庚申七夕

をのつからいをねぬけふも天の戸の
明るやしたふほし合の空

同五八十三千秋刑部少将勸進
660 勸持品

さはりぬる空の雲霧しのき来て
深ゆく月や世をてらすらん

為説是経故 忍此諸難事

同五八十五公宴御當座
661 野月

雲霧をはらひつくせる月みよと
まねく尾花の野への秋かせ

662 水郷月

所からわきて光やすむ月の
かつらの里のちかき川かせ

同五八廿五公宴御月次
663 新樹

今までのさく花もかないかならむ
春にとらぬ夏木たちかな

664 近恋

はかなしや宿をならへてものゝ音の
かよふはかりをたのむ契りは

665 野風

誰ありてあはれもかけん風そよく
しのゝ小篠の野へのかり庵

三首分アキ

天文六年 八十一首

卅一才五月廿二日叙之同廿四任之
従三位行左兵衛督藤原言繼花押

天文六正十三於二条殿當座
666 梅多春友

世々のかせ吹つたへてや色も香も
ともにみきりの春の梅か枝

同六正廿六公宴御會始
667 鶯是万春友

千尋ある臺の竹の代々の春
契りをきてやうくひすのなく

同六正卅近衛殿御會始
668 梅久薫

さゝれ石のいはほとなれる春をへて
枝もさしそふ宿の梅か香

同御當座
669 春月

いつよりか契りそめけん空の月
おほろなる影を春の光に

同六一八飛鳥井亭會始
670 寄神祝

君かへんいく萬代も三かさ山
春のひかりやなをあふかまし

同當座
671 浦霞

かすみけり浦つたひつゝこく舟の
ちかきもとをき春の明ほの

672 眺望

なかめやる雲もかすみも山のはは
おなし梢の花の色かな

同六二廿五公宴御月次
673 聞郭公

むら雨の過る雲間にほのかなる
月に一こゑ山ほとゝきす

674 九月盡

なかりし夜半もかひなくけふに暮て
あすはいつこに秋の行らん

675 寄衣恋

ともすれはうらみ返してから衣

50

50

51

たちあくるしき物おもへとや

同六三十六公宴御當座
676 濱帰鴈

見すて、は春の海邊のいかならん
鴈かねとをき住吉の濱

677 述懐

君か代をさしてまもらは三かさ山
木たかき松の常磐かきはに

同六三十五公宴御月次
678 河款冬

ちる花の名残をとへは吉野河
いはぬ色にしさける山ふき

679 暮春月

行春をしたふとすれはつれなくも
かすめる月の有明のかげ

680 忍久恋

いかにせむとしをふるやの軒の草の
忍ふにあまる露のみたれを

同六四廿五公宴御月次
681 首夏風

けふもまた花にならひて夏木たち
ちらぬ青葉をさそふ朝かせ

682 擣寒衣

うちもねぬよ所の夜さむも身ひとつに
しつかさ衣うらみてやうつ

683 寄舟恋

うらみわひ身はすて舟のかちをたえ
よるへもしらぬ思ひいつまで

684 行路市

をのつから行かふ袖もすきかてに
ところせきなる三輪の市人

同六五十二於柳原亭月次會始
685 寄巖祝

おもふにもいつのさ、れの巖とか
みきりにわれて生のほるらん

同當座
686 蘆橘

五月雨の露のしめりもあらぬまで
ね覚のまくら匂ふたち花

—
517

同六四廿一日野町勸進
687 忍久恋

軒の草の忍にあまる袖の露
いく夏秋に消帰るらむ

同六五廿五公宴御月次
688 郭公

ほと、きす待し日数のうらみをも
ことはりかほに今夜なくなり

689 五月雨

五月雨は庭もさなから海ひろく
あらぬ山よりおち瀧つこゑ

690 名所旅泊

さらにたにねられさりつる浪まくら
こよひ明石の月になり行

同六六十二於広橋亭月次當座
691 五月雨

空にのみ雲も日数もかさなりて
なを晴やらぬ五月雨の比

692 見恋

中／＼のなさけそつらきみし人を
みすはかくまでおもはし物を

693 不逢恋

われにこそつらくはありともむくひある
ためしは人になきならひかは

同六六廿五公宴御月次
694 旅宿三月盡

いく野山分つ、われもくれて行
春はいつくをとまりなるらん

695 七夕後朝

きぬ／＼の涙やかけし織女に
かしつる袖のけさのしら露

696 峯雲

春ならは花とやままし山ふかみ
むら／＼かゝる峯のしら雲

同六七夕公宴
697 七夕月

あまの川この夕浪の月の影
さし行舟やほし合の空

同六七廿於山上梶井御門跡御當座
698 湖上秋夜

秋の夜の明るかきりをあかなくも

—
527

—
527

699 湖上聞鹿

月のみ渡るせたのなかはし
しかのうらや松にこたへて大ひえや
尾上にちかきさをしかのこゑ

同六七廿五公宴御月次
700 田上稻妻

よひ過る田面の露もほのめくや
月まつ雲にいなつまのかけ

701 秋花色々

色くの花さく草のあるか中に
小萩露をく野そたくひなき

702 寄瀧盡恋

かくはかりなにはの事も身をつくし
つらきえにしも契りそめけん

同六七廿八於柳原亭月次當座
703 女郎花

風渡る野へは薄のまねくにも
なひきあひたる女郎花かな

704 秋夕

なく虫も恨をそへて夕暮の
うきをは秋に何ならひけむ

705 別恋

きぬくの餘波おもへはとし月を
つれなく過しうさはますかは

706 窓竹

まなふへきその一ふしもしらぬ身は
おほふまゝなる窓のくれ竹

同六八三於中御門亭當座
707 草花色々

なひきあひてあるか中にも秋の野は
すゝきをしなみ露の萩はら

同六八十三親王御方御當座
708 月前時雨

晴てなをてりそふ影は時雨つる
雲こそ月の光なりけれ

709 寄月見恋

恋わひぬいと、おもひは空の月
待えてこよひみるかうれしさ

710 寄月懷旧

へたてなき心も見えて月のもとに

—
53†

同六八十四於甘露寺亭當座月次
711 関駒迎

かたればしらぬいにしへもなし
時しありと又逢坂のせきの戸を
あすや越なむ望月のこま

712 寄筵恋

菅薦の三ふにはあらてさむしろの
それさへひろきひとりねの床

713 草庵雨

とへかしないつはありともしつかなる
雨にこもれる草のいほりを

同六八十五於広橋亭當座
714 月前草花

百草のはなはありともすむ月の
光うつろふ露のはきはら

715 月前述懷

ますか、みくもらぬ月の光もて
わかこゝろをもみかきてしかな

同六八廿五公宴御月次
716 五月雨

空の雲はれぬのみかはとひ来むの
人もほとふる五月雨のころ

717 忍恋

たかとかになしてうらみむ人めのみ
忍ふとすれはまれの逢瀬を

718 述懷

おもふそよいかにしてかは君にわれ
わきてつかふる身ともしられん

天文六年九月五日左兵衛佐永綱死去之間同八日遣之袖書同如此
花岳常春婦泉事朝悲歎押胸夕愁淚朽衫誰人
不患之乎仍首置弥陀名号卒綴六首之野語述
寸心之卑憶云 武衛言繼

719

なげきてもさそなけくらんたらちねの
をやむ涙のひまもなきまで

720

むつましくなりける物をそれなから
いまはこたへぬ面影にして

—
54†

721

あはれともた、なをさりの言の葉に
いひ出ぬへきこのおもひかは

722

みしは夢なきをうつ、の世なりとは
しりてしもなをしたはる、かな

723

たくへてもよ所にはいさやおもはしき
さてもこ、ろのありにし物を

724

ふたつなく又三なしととく法に
みちひかれてやいたる彼さし

同六九九公宴
725 秋菊盈枝

萬代もこ、ぬかさねの秋の菊
なをさきそふや枝もたは、に

同六九廿五於柳原亭當座月次
726 麓薄

くれ渡るふもとをさむみむらゝの
薄をしなみ秋かせそふく

727 暁更鳴

なかき夜の暁までになにをまて
うきかすゝの鳴の羽かき

728 旅泊聞嵐

須まのうらやうしろの山の嵐さへ
いと、うきねの波まくらかな

同日公宴御月次
729 擣衣

夜もすから月におきあの里人や
た、手すさみに衣うつらむ

730 紅葉

しくれつ、山みなそむる紅葉、に
立ましる松もくまとなりぬる

731 瑞籬

あまねくも世を照すてふそのかみの
天の岩戸やあけの玉かき

同六十一於烏丸亭月次當座
732 寒草

花もいさ及はむ物か冬かれの
汀のあしの霜のむら立

547

733 鷹狩日暮

帰るさの道もむもれてはし鷹の
手ふるひさむき雪の暮かな

734 別恋

きぬゝのつらき涙にむせかへり
又もたとのむ言の葉もなし

天文六十一十二於極陽亭月次當座
735 納涼

立よれば木陰をふかみ行水の
こ、を瀬にとや涼しかるらん

736 雪

都には雨とくれ行けふもさそ
つもりてふかき峯のしら雪

737 契恋

あさはかのわか契りかは羽をならへ
枝をかはせるためしをそ思ふ

同六十一廿五公宴御月次
738 薪

おりしありと峯の薪をこりつみて
雪にやしつか冬こもるらん

739 鴛鴦

風さゆる池の汀に夜をかさね
霜をかさぬるをしの毛衣

740 思

かくとたにいひたにしも出す人めのみ
つ、みわひぬる思ひとをしれ

同六十二十二於中御門亭月次當座
741 冬河

冬ふかく氷る河邊のさよ千とり
あかしかねてや鳴わたるらん

742 冬草

花にしもおもひはかへし難波江や
蘆の葉しろき雪の明ほの

743 冬鷺

よる浪も氷る洲さきにひとりのみ
ねふれる鷺のさそなさむけき

同六十二廿五公宴御月次
744 更衣

けさよりははやぬきかへて夏ころも
うすき衫は花の香もなし

557

558

745 時雨

此比の空にのみしてふる事は
さためぬ雲のむら時雨かな

746 寄雲恋

あさはかの人のこゝろはしら雲の
なひくとしてしもいかゝたのまん

四首分アキ

天文七年

三月八日任之卅二才
四月廿五日任之
左衛門督

参議従三位行左兵衛督藤言継花押

百十七首

天文七正廿九公宴御會始

難波津の春の色香をそのまゝに
吹つたへたる梅のしたかせ

同七正廿六飛鳥井亭會始

君か經む千とせの齡かそへあけて
雲みによはふ鶴のもろこゑ

同七正廿八二条殿御會始

色ふかき立枝の梅のさきそひて
年いくかへりにほふ春かせ

同御當座
750 眺望

なかめやるこゝろは春のはなにめて
月にそよするしかのうらなみ

751 祝言

末とをきなかれをしれといやましに
いく世かすめる庭の池水

同七二四於愚亭會始

子日する二葉の松の生さきを
君に契りて萬代や經む

同當座
753 浦霞

浦遠くなきたる浪に見わたせばは

754 祈恋

千里をかけてたつ霞かな
人にいま祈るしるしをみしめ繩
行末かけてなをやたのまん

同七二五於万里小路亭當座
755 初逢恋

折しあれは人の心も春にあひて
けふとけ初る春の下紐

同七二二於南都東大寺内松井□□亭當座
756 若菜

梶井宮之廳務也
打むれて若菜つまんと春の日の
光にあたる野へに出つ

同七二廿五公宴御月次
757 残春少

したふるもとまらぬ春の梢とや
花はいく日もあらし吹らし

758 雨後月

深てこそさはりし雨のうらみをも
かへすはかりに月はすみけれ

759 寄橋恋

いまはたゝ名のみなからの橋はしら
絶てほとふる中そわりなき

760 羈旅

旅ころも立帰る空の限あれは
こえてうれしき會坂のせき

同七二卅於愚亭月次當座
761 春月

玉すたれ巻あけてみれば影うすく
有明かすむ春の明ほの

762 忍恋

かくとたにいかゝしらせむよそにのみ
もらさしとすれはもらしわひぬる

同七四十七外様申沙汰當座
763 庭松

世々を経てなを陰ふかく君そいま
みきりの松の常磐かきはに

同七四廿五公宴御月次
764 郭公

ほとゝきす一こゑもかなむらさめの
雲間の月の明ほのゝそら

56 7
56 7

57 7

57 7

765 月

秋のかせ吹たつからに雲霧も
及はぬ夜半の月をみるかな

766 初恋

行末の秋いかならんおもひ草
けふよりかゝる袖の上の露

767 述懐

春日山藤の末葉のさりとも
たのむめくみの行ゑをそ思ふ

768 納涼
貞照
同七二飛州姉小路向上洛於彼亭當座

茂りあふ木陰のみかは立よるに
水ゆく河のありて涼しき

769 納涼
同七五十二於松田豊前守館當座月次

そことなく磯うつ浪の玉ちりて
みるめ涼しき松のひとむら

770 松為友

代々經へき生ささしるく君といま
ともにみきりの杏の木たかさ

771 夏夜
同七五十八公宴御當座

待出て見るてふ程もなつはた、
こゝろみしかき夜半の月哉

772 遠村夕立

一むらの梢の雲もみるか内に
うつるやよその夕立の空

773 後朝恋

きぬくの名残はいつくしら露の
かゝる形はけさそくるしき

774 雨中郭公
同七五廿三二条殿御月次

ほと、きすやよなき出よ月をそき
夕の雲のむらさめの空

775 来不留恋

わりなしやよるかとみれば立かへり
なこりを浪にしたふたもとは

776 夏衣
同日當座

かけあつき日も夏衣うらかけて

58†

谷行かほの夕涼しき

777 舟中納涼
同七五廿四親王御方御當座

河かせや柳の木かけ舟とめて
水もみとりの色そ涼しき

778 忍久恋

年ふれる軒端の草のしのふにも
あまりて袖の露そみたる、

779 残月越関

會坂の関路こえつ、たひに行
名残はしはしあり明の空

780 梅雨
同七五廿五公宴御月次

立いてむ宿さへ雲にとちられて
ひとりこもれる五月雨のころ

781 納涼

みるにまつ涼しく成ぬむらさめの
あとはしつくのもりの夕露

782 曉鷄

ねさめする枕夜ふかき鳥かねを
たかきぬくのつらくきくらん

783 夕立
同七六十三近衛殿御會始兼日

夕立の跡よりやかてほともなく
むらく雲をはらふ山かせ

784 杜蟬

あつき日もへたつる杜の木陰とや
涼しくひく蟬のもる聲

785 片思

思ふにも人の心はかたいとの
いかにしてかはよりも逢へき

786 氷室
同七六廿四親王御方御當座

夏まてはいかにあつめて松か崎
ひむろの雪の消残るらん

787 白地恋

はかなしや思ひ亂れてしら露の
結びもとめぬ袖の夕かせ

788 山家猿

山さとはさはくあらしにおち椎の

59†

58†

おちさたまらすましらなく聲

同七六廿五公宴御月次

789 藤花始綻
めつらしくけさ吹かせによせくるや
みきはの藤のはなのしら波

790 近見池蓮
立よりてみればこゝろもいさきよき
池のはちすの玉のあさ露

791 等思兩人
いつれとも思ひもわかす二あいの
心やおなし色に出らむ

792 深洞鶴多
仙人のすみかおほえてほらの内に
むれゐるたつの聲の、とけさ

同七六廿八於大隅守所當座月次
793 春植物
陰しけき木々はあるとも春ことの
花にはいかて立ならふへき

794 秋動物
秋の夜のいをねぬ人やなくさめて
田面の月にさをしかのこゑ

795 冬神祇
あか星のこゑもいまさら雲の上に
きこえあけつ、うたふ宮人

同七六廿九二条殿御月次當座
796 鶺鴒川簞
影なからみればかゝりの大井川
いかにか魚のおとろきて行

797 契恋
しれはた、わか身そつらき契りても
たか心よりあさくなすらむ

798 不見恋
あた浪のあたにそまよふみるめなき
たかしの濱のたかき名たては

同七七七七於中御門亭當座
799 織女契久
彦ほしのけふの逢瀬は契りけん
年いくかへり天川なみ

同七七夕公宴

同七七夕公宴

59

800 家々七夕
けふといへはそのしなく、にたれもみな
もれぬ手向やほし合の空

同七七廿三理覚院勸進為故民部卿入道為廣卿(○宗清)十三回
801 弥陀
さまの法はありとも四十あまり
八のちかひをたのまさらめや

802 懷舊
似たるその人しもなしとげふさらに
したへはかゝる袖の露かな

同七七廿五公宴御月次
803 萩漸盛
雨過る野路の真萩のさきそひて
いまそ色なる露の玉川

804 鹿聲幽
峯たかみ松のあらしにさそはれて
たえくかよふさをしかのこゑ

805 見恋
みるめかるたよりしなくはかくはかり
しほらし物を袖のうら浪

同七七廿七千秋刑口少輔勸進為故兼永卿三回追善
806 提婆品
身をかへて仏の道にいたること
き、えし法のちから成けれ

同人ニ替テ
807 勸發品
いた、きを三度なて、も四のしなに
もれぬ御法ときくかうれしさ

同七七廿八親王御方御當座
808 原薄
をく露もみたりかはしく薄生る
草の原野の秋の夕かせ

809 寄琴恋
逢みてやいともうらみん人はなと
ことかたにひく心なるらむ

810 尺教
雲霧もはらひ盡して心月
空に晴行光をそみる

同七八五奉行治口兵衛大夫勸進
811 對萩
花の色もをくあさ露もみるか内に

同七八五奉行治口兵衛大夫勸進

同七八五奉行治口兵衛大夫勸進

60

60

ひかりそひ行庭の萩はら

同七八七於二条殿御月次當座

山はいまみなから雲にうつもれて
やとらん花のかけたとるなり

813 寄舟恋

海士小舟はつかに見てし面影に
いく度袖の浪はかへらむ

同七八十二於柳原亭月次當座

なかめすや秋の海邊もあり明の
月に鴈なく住よしの濱

815 独述懐

身ひとつのうきになしても猶そ思ふ
宿からつらき秋かせのそら

同七八十五於廣橋亭當座

うす霧の中空かけてすむ月は
むへ山かせを光なるらむ

817 月前鴈来

とふ人をまつ夜の月に来る鴈は
たか玉章のたよになるらん

818 閑居月

さひしさは又もあらしの柴の戸や
ひとりねぬ夜の月の明かた

819 寄月逢恋

たくひなき面影みせて人もいま
月をかことにとふるうれしさ

同七八廿五公宴御月次

さく藤のなかきしなひのむらさきは
かせのみたせる糸かとそ見る

821 納涼

山水を庭におとしてをのつから
涼しくもあるか松のした庵

822 落葉

ちり敷て又や千しほの色ならむ
霜よりしたの庭の朽葉は

823 山家

われのみとたへてさひしき山里を

61

なくさめかほに月もすみけり

天文七年九月五日故左兵衛佐永綱法名常春一回之間觀經
一卷翻枝筆跡書写之藤宰相遣之包紙

824 さらけふ袖しほるなりわかれこし
秋の時雨の一めぐりして

藤宰相贈答

さらにけふとはる、人の言の葉に
いと、涙の露そしくる、

左衛門佐以緒替て予

さらけにいまその面影をしたふてふ
露もしくれも涙そへつ、

827 觀經連經にて侍し又予

はかりなき法を觀法をき、ていま
彼国にしもいたらさらめや

同七九五町勸進
828 松藤

ささかゝる松の下枝の春かせに
よせてかへらぬ池の藤なみ

同七九九公宴
829 菊有長生種

露ながら山路の種をうつしうへて
千とせもあかし秋のしら菊

同七九九於廣橋亭月次當座

830 月不秋
花洛月

いづくにか月の光も九重の
みやこにいたる影はみてまし

831 逢恋

いひかはす袖のうへにもなみたた、
せきあへす落る新枕かな

同七九廿五公宴御月次

832 月不秋
おりくのいつはありとも月はた、
秋にひかりやわきてすむらん

833 擣衣欲曙

なかき夜もはや明かたの鐘のこゑ
鳥か音そへて衣うつなり

62

61

834 松風調琴

をのつから松にかよひて吹たつや
南のかせのしらへなるらむ

同日公宴御當座
835 寄玉恋

せめてた、人のとへかししら玉か
なにそはかゝる袖の露とも

同七十九親王御方御當座
836 水郷月

月遅き影や待らむかたしきの
袖も夜さむのうちのはしひめ

837 待空恋

たのめしも又いつはりには人はなと
つれなくのみも有明の空

同七十五夜親王御方御當座
838 暮春惜花

いかなれはしたふとすれと花も根に
帰る夕の春の山かせ

839 閨時雨

ねやの上はしくれ木の葉のあらそひて
何とね覚めの枕とふらむ

840 漁夫出浦

あはれにも浦わを遠み舟さして
釣する長の浪にうかへる

○ 同七十廿一於鳥丸亭月次當座
841 庭雪厭人

つらくしも跡みむ庭のしら雪は
とはぬそ人のなさけなりける

842 毎夕待恋

暮ことのまつにしろしをたのめても
とはてや人は杉たてる門

同七十八親王御方御月次御當座
843 寄鷺恋

おもふそのたよりしあらは鷺のすむ
山路のおくも尋てやみむ

844 故郷

さらぬたにとふ人まれの松の戸に
此しろ雪のふるさとの空

845 瑞籬

君か代のためしにいまも宮川の

┌
627

なかれ久しき神の水かき

同七十廿五公宴御月次
846 納涼

むすふ手のあかすとひきて里人や
しはしあつさを忘井の水

847 擣衣

夜さむなをよそにしられてあはれにも
しつかきぬたのこゑしきるなり

848 寄雲恋

なひくともいか、たのまむさためなき
人の心のすゑのしら雲

849 仏寺

ともし火の影もほかにあま小舟
泊瀬のかねの霜にさえ行

同七十一十八親王御方御當座
850 池水鳥

霜さゆる池のみきはの夜床もや
さそなうきねのをし鴨のこゑ

851 寄都祝

いにしへの跡もかはらす百敷の
道しある世をなを思ふかな

同七十一廿一於甘露寺亭當座月次
852 寒月

さはるへき雲も氷りてさゆる夜の
空にすみ行月の影かな

853 杜頭祝言

君か代の光そへとやくもりなく
神も岩戸をあけの玉かき

同七十一廿五公宴御月次懷紙也
854 逐日雪深

あつめねと日をふるまゝにをのつから
つもりてふかき窓のしら雪

855 朝遅帰恋

きぬくをしたふとすれは朝かほの
花の露さへ消かへりつ、

856 胸消是非

よしあしの世のことはりも心とめて
しれはむなしき空のうき雲

同七十二四於清水式口丞亭當座月次

┌
637

┌
637

857 氷
むかひみる池のか、みやをのつから
風のみかける氷なるらむ

858 門
君か代にいく春秋をつかへきて
たれも老せぬ門をしや思ふ

859 同人ニ替て
鴨
冬かれの入江にたてる蘆鴨の
青羽は見えて霜のさむけさ

同七十二十於藤宰相亭月次當座
860 水鳥
なれつ、も汀やさむきひとりぬる
をしの衾は霜をかさねて

861 枕塵
はらひてもいふせき床のまくらかな
をのつからなる塵のみにして

同七十二廿五公宴御月次
862 三月盡
春の日のなかきためしもいたつらに
うつりてはやくけふに暮ぬる

863 寢覚時雨
何をさてなくさめにせんさ夜枕
かゝるね覚のしくれさりせは

864 尺教
か、けつ、その暁や松杉の
おくある寺の常のともし火

数行アキ

天文九十十月廿一日ヨリ三ヶ日
於禁中
太神宮御法楽御千句追加發句
發1
みか、れて月をや光玉あられ

同十一月十六日
於禁中
勤喜天御法楽御千句第十發句題雪
發2
降そひて千重百敷のみ雪哉

数行アキ

天文八年五十九首

卅三才
三月廿三日
兼加賀權守

參議從三位行左衛門督藤原朝臣言繼花押

天文八正廿一於廣橋亭月次會始
865 竹不改色
千尋ある陰をふかめてくれ竹の
春にいく代のみとりそふらん

同當座
866 梅風
梅か香のさきそめしより四方にはや
かくれぬ物とさそふ春かせ

同八正卅近衛殿御會始
867 多年翫梅
いく代々のかさしならなん難波津の
春をうつせるやとの梅か香

同御當座
868 早苗多
おりしありと千町の田つら末かけて
いくその民か早苗とるらむ

同八二六公宴御會始
869 還年花珍
君か代の光もそふや春を経て
なをいやましの花の色香は

同八二六於飛鳥井亭會始
870 水石歷幾年
浪よする池の汀に苔むせる
いはほはいつのさ、れなるらん

同當座
871 早蕨
薪こり又むらさきのちりひちの
山をそ分る春の山人

同八三廿六親王御方御月次御當座
872 瀧花
山たかみうつろはぬまも風ませに
みたる、花や瀧のしら玉

873 寄花初恋
玉たれのひまほのかなる春かせの
心にかゝる花のおもかけ

同八三廿九於極騰亭當座月次
874 樹陰早蕨 おる人も見えてむら／＼山姿の
落葉にまじる峯のさはらひ

875 藤埋松
降つみし雪より後も忝か枝の
又うつもれてかゝるふちなみ

876 海眺望
見わたせはうら浪とをく立つく
霞にうかふ沖のつり舟

877 岡躑躅
紅の色を残して夕附日
さすや岡へのつゝしなるらん

同八三卅公宴御當座春日社御法楽
878 憐春月
いつはあれと花さく比の長閑にも
かすみなしたる春の夜の月

879 荻近
夕まくれまつとはなしに秋かせを
まつき、ならす軒のした萩

880 虫聲急
野へちかき宿はおり／＼ふくかせの
さそふか虫のこゑしきるなり

881 厭恋
せめてそのこたへたにせよ何により
かくかけはなれいとひはつらん

同八四廿五公宴御月次
882 松藤
松か枝にかゝらざりせは藤浪を
いかて木たかき花と見てまし

883 夕薄
せきあへす露もみたれてはな薄
むら／＼なひく野への夕かせ

884 別恋
又来むをたのめをさても名残た、
おもはさらめやきぬ／＼の空

同八四廿九於中御門亭月次當座
885 人傳郭公
ほとゝきす人はき、つと夕附日
さしていつくの空になくらむ

— 65 —

886 名所氷室
そのまゝにきえぬためしや松かさき
あつめし雪の氷室なるらん

887 思不言恋
あさからすおもふ心にこもり江の
はつかにたにももらしわひぬる

888 閑中燈
しつかにそひとり深ぬるいたつらに
まなはぬ窓の夜半のともし火

同八五廿三於高倉亭月次會
889 夜橘
たち花のはなさく比は烏羽玉の
よるのまくらに風かほるなり

890 寄車恋
まれにたにうしの車のなとてかく
めくりもあはぬえにしなるらん

891 寄書祝
日本紀しるしてしよりいまもなを
おさまれる世は君かまに／＼

同八五廿五公宴御月次
892 五月雨久
いつはあれとなを此比は久かたの
空晴やらぬ五月雨の雲

893 月添涼氣
見るほどはみしか夜なからす、しさは
秋も及はぬ月のかけかな

894 栽松為友
二葉よりうへて千とせの友とのみ
みきりにしるき松の生さき

同八六廿五公宴御月次
895 杜若
深水にうつれるかけもさくはなの
いろはへたてぬかきつはたかな

896 紅葉
柞原そめし時雨のいかなれば
なを色うすき紅葉なるらん

897 埋火
雪あられさえさゆる夜もかきをこし
むかへは春のねやの埋火

898 祝
君か代の道し有ける時にあひて

— 66 —

いともかしこみなをそつかへん

同八閏六廿五公宴御月次

分ぬへき道もわかれす夏ふかし
所せきなる露の草むら

899 夏草露滋

行水に影をひたしてす、しさは
底るもしらぬ月のさ夜かせ

900 水風夜涼

あかしかた波のよる／＼おもひそめし
人に心を岡の邊のやと

同八七廿五公宴御月次

901 寄名所恋

夕附田もつわな色かむらしくれ
はるれはふかき峯の紅葉

同八七廿五公宴御月次

902 三月盡

春の日のなかきかひなくやよひ山
いつくにけふのくれて行らん

903 朝霧

あさ日影さすかにみえて山の端は
そこともわかぬうす霧の空

904 池水鳥

さそなうき翅もこゑもさゆる夜の
水にとつる池のあし鴨

同八七廿六於梶井殿御當座

905 紅葉

夕附日うつろふ色かむらしくれ
はるれはふかき峯の紅葉、

906 聞恋

ふく風もまつにならひてことのねの
きこゆる空に心ひくなり

907 述懐

大ひえやよそに名たかくきこえあけて
たえずつかへん道をしそおもふ

同八八十四於一条殿御會

908 花洛翫月

みる人のいつくはありとも空の月
わきて都の秋をしそおもふ

同御當座
909 暁月

明ぬまで此ころ秋の月にめて、
とりもいをねぬ音をやなくらん

910 山家鳥

かりそめにとふさへさひし鳥かねも
き、しらぬのみの山ふかくして

同八八十五夜於廣橋亭當座

911 月前風

わきて猶くもらぬかけは月の中の
桂も秋のかせやたつらむ

912 田家月

をのつから門田の稲葉もらぬ夜も
月にいをねぬ秋かせの空

913 寄月祝

あふきみむ月の光もます鏡
くもらぬ時を空にうつして

同八九九公宴

914 籬菊

仙人も袖やふれけむさく菊の
けふ九重の花のまかきに

同八九十五伊勢与一入道勤進八幡法楽

915 時雨過

落葉せしあとの梢に一とをり
なにを時雨の染て過らむ

同八十三三条西勤進道遙院第三回經之裏

916 五百弟子品

内外にもかへしあらはしさま／＼の
法のをしへをきくかうれしさ

内秘菩薩行
外現是聲聞

917 懷舊

けふさらにしたふもかなし神無月
時雨を袖のうへのみにして

同八廿五公宴御月次

918 時雨晴陰

いく度かくもりみ晴みしくるらむ
行かへる雲の遠の山のは

919 牆根寒草

卯花のちりし牆根のおも影を
残すや今朝の霜のした草

67

67

68

920 漁舟連浪 山かせをみせてや浪にうかふらむ
一葉数そふ沖のつり舟

同八十一廿五公宴御月次

花鳥の跡もと、めす暮て行
なをけふのみののおしき春かな

921 暮春 花鳥の跡もと、めす暮て行
なをけふのみののおしき春かな

922 夕霧 それとなくあはれもふかし夕暮の
まきのと山の秋霧の空

923 木枯 もろかりしよその梢にならひてや
いまはた松に木からしのこゑ

三首分アキ

天文九年 卅五首
参議従三位行左衛門督兼加賀権守藤原朝臣花押

天文九正廿近衛殿御會始
924 竹不改色 代々経ても葉かへぬ宿の呉竹に
をのれ時しるうくひすのこゑ

同九正廿一公宴御會始
925 桜柳交枝 立ならふ柳桜のいくかへり
おなしみきりに匂ふ春かせ

同九二三勸修寺入道勸進聖廟法樂
926 千鳥 すみ渡る月のさ夜かせふくる夜に
なきて千鳥のいつち行らむ

同九二十一近衛殿御勸進 能州へ
927 法師功德品 をのつから雲霧もなく空の月
ひとりさやけき山風のこゑ

同九二十一 人に梅を遣す ふる雨に梅の花かさとりもあへす
しと、にぬれし袖をみせはや

同九二廿五公宴御月次
929 籬款冬 山吹の八重の籬のよそにしも
いかにこほれて匂ふ夕露

930 庭月 みるまゝに庭のやり水すさましく
すみ行月のかけ深にけり

931 寄湊恋 いかにせはかきもつくさむ水莖の
岡のみなどのさはく心を

932 嶋鶴 のとかなる空に心をかはしまの
あしまにたてる友鶴の聲

同九三七神宮法樂細川播州内下河原勸進
933 柳靡風 百千鳥さえつる聲も一かたに
なひくか風の青柳のいと

同九三廿五公宴御月次
934 花纒残 春ふかく青葉か底にふく風も
日影もしらぬ花の露けさ

935 三月盡夕 くれて行春の餘波を夕附日
さすかにうすくたつ霞かな

936 寄山恋 とにかくに積るつらさはちりひちの
山としたかく物おもへとや

同九四廿五公宴御月次
937 松下晚涼 底清み行水ありて涼しさは
夏ともいさや松の夕かけ

938 山家鳥 すみなる、われをはしるや名もしらぬ
小鳥しはなく山の明くれ

同九五廿五公宴
939 郭公欲帰 ほと、きすをのか山路に帰るとも
名残やしはし有明の空

940 樹陰夏風 風の音秋にやならの木かけ行

687

697

697

道のかたはら夏としもなし

941 寄海驛旅

立帰る浪をためしにさし行や
わか友舟のつゝく海はら

942 納涼

同九六廿二公宴祇園社御法楽懷紙 依疫病御祈禱也
涼しさやこゝを瀬ならむ結ふ手に
あつき日影はいさら井の水

943 神祇

たれもみなあふく祇の園の中
四方にへたてす世をまもらなん

同九六廿五公宴御月次

944 晚夏蟬

立よれば夕や秋にならの葉の
そよや雨きく蟬のもろこゑ

945 隣里鶏

おき出て月にむかへは鳥かねも
まちかき里の明わたる空

同七七夕公宴

946 年々河溪明

彦ほしの逢瀬くもらぬけふといへは
年いくかへり天のかは浪

同九八十五於 禁中當座

947 翫月

わきて猶したふ心の雲霧も
月にはかけし秋の半天

948 対月憶昔

いにしへのたか心よりいつはあれと
けふの天夜の月をみるらん

同九九九公宴

949 菊送多秋

君か經む世をしら菊や千とせをも
こゝのかきねの秋にさくらし

同九九廿五公宴御月次

950 惜花

風ませにみたる、雪とちる花を
ふたゝひ木々に返してもかな

951 隣槿

隣をも花はわかてや中かきの
かなたこなたにさける朝かほ

952 炭竈

草木さへそれとはわかぬ雪の内も
けふりにしるき峯の炭かま

953 怨恋

いまはた、とひやたえなんなをさりの
うらみをこそはかこちてもやれ

同九廿廿五公宴御月次

954 冬月

むら時雨くもるとみしもいく度か
晴ては月の影をそふらむ

955 山家

たれをしも待とはなしに山里は
落る木の葉の道いか、せん

同九十一、於廣橋亭當座

956 野路霜

おき出る野への草葉はみし秋の
花より花にをける霜かな

957 鷹狩

岡のへやす、吹かせにはし鷹の
手ふるひさむき雪のかり人

958 寄草恋

あはれなとしの、葉(草)のしのひても
逢みる斗のかりそめもなき

四首分アキ

同十二八於飛鳥井亭會始

960 梅萬春友

難波津の道の光も色そひて
かはらぬやとにさくやこの花

天文十年 四十首

天文十二五公宴御會始

959 遐齡如松

よはひなを松に契りて友鶴の
よはふや君か萬代のこゑ

同十二八於飛鳥井亭會始

960 梅萬春友

難波津の道の光も色そひて
かはらぬやとにさくやこの花

70

70

71

71

同當座
961 深春駒

春もまたあさくは小野の浅き草に
つなきやとめし駒いはふなり

同十三廿五公宴御月次
962 惜花

したひわひぬおなし心に蝶鳥も
ともにみたる、花の春かせ

963 嶺紅葉

時雨せし梢の雲のかつ晴て
夕日色こき峯のみち葉

964 寄瀧恋

いへはえにいにはせかれて落瀧つ
千々に心をくたくとをしれ

965 鞆中懷都

旅衣かへすくもおもひ出る
都は花の春のめくみを

同十四廿五公宴御月次
966 新樹

花にそめ青葉にかへて二あひの
色にしけれる露の木ふかさ

967 夕郭公

一こゑはそれともわかす夕くれの
月まつ雲に山ほと、きす

968 釣舟

春秋の花も紅葉もなみのうへの
心になにかうかふ釣舟

同十五七故妙法院宮御百ヶ日伏見殿ヨリ御勸進
969 授記品

いまよりそ緑立そふ木々をうへて
紅葉の秋の色をまつかな

同十五七故梶井宮御一周忌同御勸進
970 父少百子老

行としをさかさまにともたらちねの
ために老せぬくすりをやえし

同十五廿五公宴月次
971 初郭公

いく度かまつ夜過けんほと、きす
ことはる程の初音きかせよ

972 田家時雨

をしねほす民の戸いかにみるか内も
しくる、雲の晴くもる空

973 寄名所恋

とにかくに人もつれなく音なしの
やまし心の思ひいつまで

974 寄星祝

なへて世にあふくや星の北にゐて
うこかぬ時とさそまもるらん

同十五廿八公宴神宮御法楽御當座
975 夕立過

晴行もふるも程なくふく風の
名残にあかぬ夕立の雲

976 寄藻恋

はやき瀬の水のまに／＼なひき藻の
なひく姿はとけて見まほし

同十六廿五公宴御月次
977 庭董菜

もえ出る庭の若草あるか中に
わきて色こくさくすみれかな

978 袖月

夜もすから月に心をそま人は
おほえすをの、えもくちぬへし

979 時雨知時

そらにまつたかをしへてか神無月
冬たつ日より時雨そむらむ

980 聞恋

よそにのみきくのした露積りては
測ともならんわかおもひかな

同十七七公宴
981 水邊望天河

彦ほしのけふの逢瀬もたえす行
此水上やあまの河なみ

同十七廿五公宴御月次
982 野草帶露

秋草の花野の露は日にみかき
風にみかける千々のしら玉

983 夜深聞鹿

あちきなく妻とふ鹿の聲もなを
身にしむ月のかけふけにけり

984 經年同恋

いく秋の時雨もこそ常磐山
さのみ心のなとかつれなき

同十七廿七諏方社法楽人代
985 野露

天地のめくみをうけてひろき野の
草葉残らすをける露かな

同十七廿九西三条新大納言勸進粟屋兵庫助七回追善
986 鑪中旃檀

二葉よりしるき匂ひや雲霧の
空にあまねき四方の秋かせ

同十八廿五公宴御月次
987 里黄葉

色ふかく山路いく度しくるらむ
ふもとの里の今朝のみち葉

988 寄河恋

待わひぬ尋てこよひきませ川
帰るなみたはさもあらはあれ

同十重陽公宴
989 菊是類齡葉

老をたにのふるためしを菊のうへに
けさをく露はたれもうくらむ

同十九廿五公宴御月次
990 朝萩

ふるとしもしらぬ夜の間のむら雨は
けさみる萩のうへに色こき

991 契恋

契りしもかはる心のあた浪に
うらみて帰る袖しほるなり

同十廿五公宴御月次
992 氷始結

よる波にしからみかけて池水は
けさしつかにもうす氷せり

993 狩場霰

空はなを霰みそれにさえくれて
鳥たちやたとるけふのかり人

994 竹作友

とし月をなれつゝあかしくれ竹に
契りて代々のかけふかむらん

73

同十一廿五公宴御月次
995 遠山雪

むかひみる遠山鳥のますか、み
雪やみかける光なるらむ

996 向爐火

雪あられさえとほる夜はかきおこし
ねられぬわざとむかふ埋火

997 後朝恋

今朝もなを涙そまよふ衣くを
いかにたとらて帰り来ぬらん

十二月十三日晚月(○映)雪阿日餘任峯三条大納言遣之

998 園の雪をもこ、にみるかな 樵夫

三条大納言返哥

雪の上に千里の月もさそなみし
君か園生の雪の明ほの 野叟

天文十一閏三四於藤中納言亭月次發句

999 發3 くは、らは又さく花の春もかな
同十一八、公宴歎喜天御法楽發句
發4 身にしむや尾上のあらし鹿のこゑ

天文十年十二月 日

拾翠藤 花押

75

74

74